

宇都宮市埋蔵文化財報告第9集

聖山公園遺跡 I

—昭和57年度発掘調査概要—

昭和58年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

昭和56年、宇都宮市営の北山霊園墓地に次ぐ第2霊園建設地として、諸般の事情から姿川右岸の上久町の台地に決定しました。

しかし、第2霊園建設地内には、古代人の生活の跡である集落跡及び墳墓等が所在することが確認されていました。

当委員会では、これ等の埋蔵文化財を重視する立場から造成にあたる関係各課と協議を重ねましたが、遺跡地の現状を変更せざるを得ず、該当する地域を記録保存するやむなきに至りました。

しかも、現状変更が予定される面積は約6haで、建設地の3分の1以上に及ぶことになりました。

そこで、当委員会としては、教育委員会の直営で5か年計画という発掘調査の基本方向を定め、56年度中に発掘調査の実施計画を策定し対応しました。

昭和57年度の発掘調査は、聖山公園(第2霊園の名称)遺跡発掘調査団を組織し、3つの指導機関及び4名の指導委員の御指導を得ながら実施しました。

当教育委員会の直営の調査としては、かつて経験したことのない大規模な発掘でしたが、関係機関・関係各位の御協力により、57年度予定した調査を無事終了することができました。

発掘調査の結果は、昭和62年度に発刊いたす予定ですが、とりあえず、57年度の調査のあらましを概報として刊行いたすことになりました。

末文になりましたが、調査にあたり終始御教導いただきました栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、栃木県文化振興事業団の指導機関及び指導委員の国士館大学教授大川清、宇都宮大学教授久保哲三、本市文化財保護審議委員会委員塙静夫・小堀時蔵先生に対しまして厚くお礼申しあげます。

なお、聖山公園遺跡の調査は、来年度以降も実施いたしますので、上記の各機関各位をはじめとして関係する方々の一層の御指導、御支援をお願い申しあげます。

昭和58年3月31日

聖山公園遺跡発掘調査団長

宇都宮市教育委員会教育長 後藤一雄

例　　言

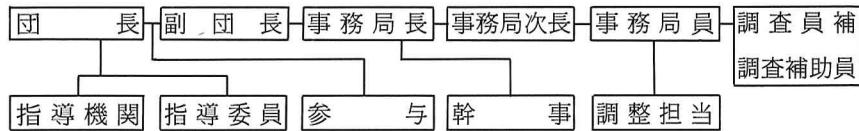
- 1 本書は、昭和57年4月～同年12月に実施した宇都宮市上久町に所在する聖山公園遺跡（宇都宮市営第2霊園造成地）の発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり、次頁に示したとおりの調査組織に基づき実施したものである。今回は第1次調査であり、今後も継続して調査を実施する予定である。
- 3 遺構・遺物の整理・実測等は、金田信夫、中田秀幸、大塚雅之の協力を得て、梁木誠がこれにあたった。また、遺物写真撮影に際しては橋本澄朗氏（栃木県立博物館主任研究員）の御指導を得た。記して感謝の意を表する。
- 4 本書の執筆は、定岡明義、木村光男、手塚英男、梁木が、編集は梁木がこれにあたった。なお、Ⅲの遺跡地の植物分布は、中田、大塚の2名が調査にあたり、松本笑悦の協力を得て大塚がまとめたものである。
- 5 発掘調査中、市民生活課・黒崎民雄、公園緑地課・大森功壹の両氏には種々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

凡　　例

- 1 本文に使用した実測図は、原則として住居跡は1/60、土器は1/3に縮尺を統一した。
- 2 土器実測図は、土師器断面を白ヌキ、須恵器断面を黒ぬりとした。
- 3 土器説明表の法量は、上から口径、器高、底径とし、丸底のものには●(○は推定)を付けた。法量値は、単位がcmで、不明をー、推定を()付きで示した。
- 4 住居跡実測図中および写真図版中の土器番号は、土器実測図中の番号に一致させた。
- 5 実測図中の標高の単位は、総てmである。

[調査組織表]

●調査団組織



●昭和57年度調査団

団長	教育長	後藤一雄	指導機関	栃木県教育委員会文化課
副団長	教育次長	鈴木丈夫		栃木県立博物館
事務局長	社会教育課長	半田 昭		栃木県文化振興事業団
事務局次長	文化振興係長	安達光政	指導委員	国士館大学教授 大川 清
事務局員 (調査員)	文化振興係	定岡明義		宇都宮大学教授 久保哲三
	〃	木村光男		市文化財保護委員 堀 静夫
	〃	手塚英男		〃 小堀時蔵
	〃	梁木 誠	参与	民生部長 荘司利明
				都市開発部長 福田泰久
			幹事	市民生活課長 水沼力男
				公園緑地課長 小林興清
調査員補	市文化財調査員	松本笑悦	調整担当	市民生活課 森田 勇
		大塚雅之		〃 黒崎民雄
		中田秀幸		〃 小森健久
		金田信夫		〃 長沢 実
調査補助員	安生サキ	安生松江	安生ミカ	石下一郎 上田チカ子
	柏渕アキ	柏渕サク	加藤 達	小林登喜子 小林マサ
	斎藤イク	佐藤正男	島崎熊夫	柴原ヨネ 鈴木市子
	鈴木義雄	田代 紗	福田カネ	福田タイ 福田タイ
	福田藤三郎	堀田一夫	真板ミネ子	松井キミ 松井 竹
	渡辺フミ	松本恵美子	松本和子	松本トシ 松本トリ
	松本和一郎	味野和テツ	森ヒロ子	森 正夫 森光ウメノ
	谷中一郎	山崎トキ		

目 次

- 発刊にあたって
- 例 言

I 調査の経過

1	発掘にいたるまでの経過	1
2	遺跡の名称	1
3	方針と計画	3
4	調査の方法	3
5	57年度発掘調査の経過	5

II 環 境

1	地理的環境	6
2	歴史的環境	6

III 遺跡地の植物分布

IV 検出された遺構と遺物

1	土壙	15
2	住居跡	16
1	号住居跡	16
2	号住居跡	21
3	号住居跡	23
4	号住居跡	27
3	古墳	34
1	号墳	34
2	号墳	41
4	経塚	47

V まとめ

- 埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向

挿 図 目 次

第1図	聖山公園遺跡位置図	2
第2図	聖山公園遺跡地形図とグリッド配置図	4
第3図	聖山公園遺跡周辺遺跡分布図	7
第4図	遺跡地内植物分布図(1)	10
第5図	遺跡地内の植物分布図(2)	11
第6図	聖山公園遺跡遺構配置図	14
第7図	1号土壙実測図	15
第8図	1号土壙出土縄文式土器実測図	16
第9図	1号住居跡実測図	17
第10図	1号住居跡カマド実測図	18
第11図	1号住居跡出土土器実測図	19
第12図	2号住居跡実測図	21
第13図	2号住居跡出土土器実測図	22
第14図	3号住居跡実測図	24
第15図	3号住居跡カマド実測図	25
第16図	3号住居跡出土砥石実測図	25
第17図	3号住居跡出土土器実測図	26
第18図	4号住居跡実測図	28
第19図	4号住居跡カマド実測図	29
第20図	4号住居跡出土土器実測図(1)	30
第21図	4号住居跡出土土器実測図(2)	31
第22図	4号住居跡出土土器実測図(3)	32
第23図	古墳群全体実測図	35
第24図	1号墳実測図	36
第25図	1号墳石室実測図(1)	37
第26図	1号墳石室実測図(2)	38
第27図	1号墳石室実測図(3)	39
第28図	1号墳出土土師器実測図	40
第29図	1号墳出土ガラス小玉実測図	40
第30図	1号墳出土直刀実測図	40

第31図	2号墳実測図(1)	42
第32図	2号墳主体部土壙実測図	43
第33図	2号墳実測図(2)	44
第34図	2号墳出土鉄器実測図	45
第35図	2号墳土器出土状態実測図	45
第36図	2号墳出土土器実測図	46
第37図	経塚断面図	46
第38図	経塚全体実測図	47
第39図	熙寧元宝拓影図	48
第40図	2号経塚出土経筒実測図	48

I 調査の経過

1. 発掘にいたるまでの経過

姿川と武子川に挟まれた台地上の山林と畠——上久町聖山公園造成予定地は、古代人の生活の場である集落跡と古墳の点在する遺跡の宝庫である。北山靈園に次ぐ第2靈園造成地の選定作業のなかで、上久町にその具体的な造成計画の意向打診が行われ、その後、可能な限り遺跡の保存を大原則に内部協議が進められていった。

55年8月 霊園造成計画の地元説明会に前後して、市教育委員会独自の遺跡分布調査を行い、遺跡保存のための府内協議を進めた。

56年8月 遺跡の開発が確定的になるなかで、「埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向」を定め、現状保存のための方策を更に検討した。

11月 市教委の直営事業として発掘調査を行うことになり、発掘調査計画策定のための市教委独自の最終調査を行った。

12月 県教委から遺跡保存及び発掘調査計画策定のための指導を受けた。

57年2月 法57条の3の規定に基づく工事等による埋蔵文化財発掘通知書を提出した。

3月 遺跡保存及び発掘調査計画の検討案について学識経験者の指導を受けた。

4月・発掘調査のための新規職員を向かえ、事務局体制を確立し、詳細実施計画の策定に着手した。

・法98条の2の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知書を提出した。

・埋蔵文化財発掘調査に係る危険防止対策要綱を定めた。

・指導委員・指導機関も含めた発掘調査団を組織した。

以上の経過により、発掘調査による記録保存のやむなきに至ったが、造成計画において、遺跡広場の設置、現状保存区域の拡大などの成果をもって発掘調査実施へと進んでいった。

2. 遺跡の名称

当地には、既に、峰台遺跡(集落跡)、峰坪古墳、將軍塚古墳、根古屋遺跡(集落跡)、1号～4号墳(古墳4基)及び高塚(3基)の所在が知られていた。

16haに及ぶ造成計画地に、これらの遺跡が所在するため、発掘調査全体を考えた場合、その取扱上、遺跡を個々に呼称することなく、一括の名称にすることが、当初から検討されていた。

このようななかで、第2靈園という仮称から一転して、緑と安らぎの広場を有した靈園の造成という新しい概念の計画が示され、仮称聖山公園の名称に、市、地元とも賛同のもとに決まることになった。



第1図 聖山公園遺跡位置図

市教委として、遺跡の特徴を表わす名称を用いるかあるいは造成計画の名称を採用するかの検討を行った結果、将来とも場所と名称の混乱を生じないよう聖山公園遺跡と命名した。

3. 調査方針と計画

調査計画策定に当たって、①遺跡は極力保存するよう土の移動は最少限におさえる。②遺跡の保存状態が良好と考えられるところは縁や広場として保存する。との方針を定め、造成計画地の遺跡の保存状態の調査を行った。

この調査のなかで、①既に関東ローム層まで現状変更が行われ遺構の壊滅が確実なもの
②急傾斜地で現状変更を行わないところ
を発掘対象区域から除外し、約 6 ha を調査対象区域とした。

調査対象区域のなかでも①周知の遺跡となっている区域でしかも②戦前、戦後を通じて手を加えられていないところを遺構保存良好地として、当初から全面発掘を行う区域とした。

また、過去の開田、植林のために相当手を加えられ遺構の壊滅が心配される区域については、トレンチ調査を行い、遺構確認の後に発掘調査の方針を決める区域とした。

これらに該当しない区域については、できる限り現状保存を行い、造成計画の設計案に対応しながら、詳細な調査を行うこととした。

このような遺跡全体の調査方針に基づき、造成計画10年を先どりする形で、造成年度の前年度までには調査を終了することとして、発掘調査年次を 5 か年と定めた。

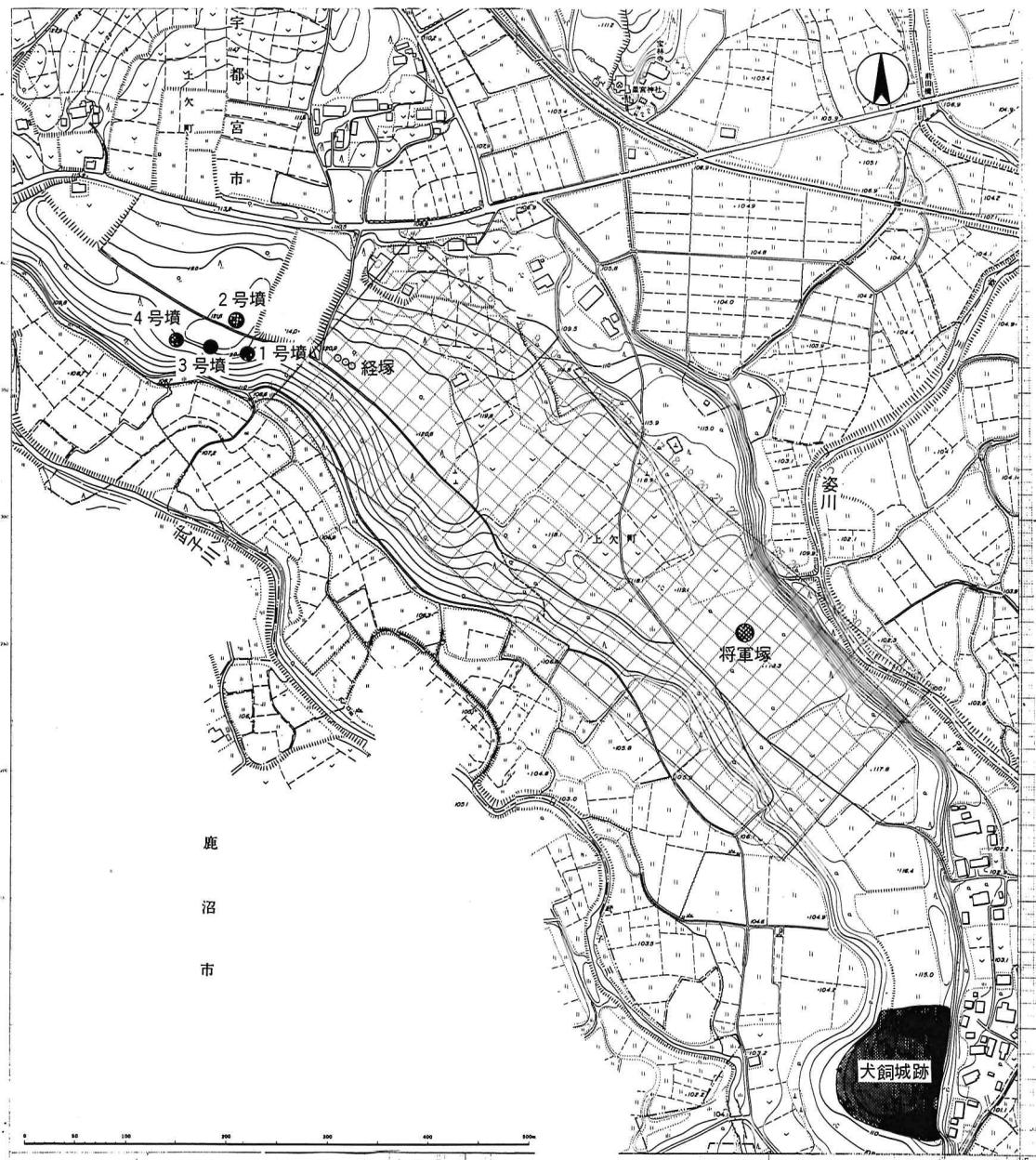
4. 調査の方法

北西部古墳群(1～4号墳)を含む一部分を除き、遺跡地全体にグリッドを設定した。グリッドの主軸方向は、北西から南東へと細長く続く遺跡地の地形に合わせるものとしたために、N-38°-Wをとっている。グリッドは、一辺20mの正方形を単位とし、横軸を 1, 2, 3……の算用数字、縦軸を A, B, C……のアルファベットで区切り、各グリッドの呼称基準とした。

確認調査は、各グリッドの直交する 2 辺に幅1.5mのトレンチを設定して行なうことを原則とし、場合によっては、さらに各グリッドを1/4に区切ってトレンチ調査を行なうこととした。

この確認調査では、一応ローム層の上面まで掘り下げることを原則とし、表土層(黒色土)からローム層上面までの間においての遺構確認に努めることとした。ただし、ローム層中の遺構あるいは遺物検出の可能性が強いと思われる場合(ローム層に切り込む遺構などの断面で確認される場合)は、ある程度の深さおよび範囲までその確認に努めることとした。

墓石地および公園関係建造物建設予定地などの明らかに地下への破壊が予想される場所は全面を発掘調査することとし、この場合、ある程度の排土を重機で行なうこととした。検出された遺構の測量は、各グリッド坑を基準に、造り方測量で行なうこととした。



第2図 聖山公園遺跡地形図とグリット配置図

5. 57年度発掘調査の経過

4月中旬は、発掘調査の準備期間にあて、測量調査のためのグリッド坑打ち、遺跡地内の植物分布調査などを行なった。実際の発掘作業は、4月下旬から開始した。

4月下旬から5月の上旬までは、今年度調査地区内の排土および遺構の確認を中心に行ない、5月中旬より遺構の調査に入った。ほぼ11月の中頃までに今年度調査地区内の発掘が完了したため、残りの12月中旬までは、来年度(58年度)調査予定地区内の排土および確認調査を行なった。

なお、主な遺構の調査期間は次の表のとおりである。

昭和57年 遺構名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
(グリッド設定)	////								
									(58年度調査地区分)
(グリッド排土)		//////////							
(遺構発掘)			//////////						
1号土 壤		□■■							
1号住居跡		□■■■							
2号 ◇			□ ■■■						
3号 ◇				□■■■					
4号 ◇				□ ■■■					
5号 ◇				□■■					
6号 ◇					□	■■■■			
7号 ◇					□	■	□		
8号 ◇					□	■■■			
9号 ◇					□	■■■			
10号 ◇							□		
1号円形窓溝					□	■■■			
2号 ◇							■■■■■■■■		
1号 墳		□■■■■■■■■	■■						
2号 ◇		□■■■■■■■■	■■						
3号 ◇			□■■						
4号 ◇							□□		
1号経 塚			□■■■						
2号 ◇			□■■■						
3号 ◇			□■■■						

(凡例) [] 現況測量調査 ■ 遺構発掘調査

□ 遺構プラン確認調査 ■■■■■■■■ 遺構測量および写真撮影

II 環 境

1. 地理的環境

宇都宮市は、関東平野の北部にあり、県北部の那須、日光の連山からしだいに高さを低めて南へ向かっている台地の端部にあたり、丁度、地形上の転換地となっている。本道跡のある上沢町は宇都宮市北西部の山地帯から南へ広がる鹿沼台地の南端部にあたり、南西方へは姿川をはさんで宇都宮西部台地、さらには田川によってつくられる沖積低地へと続いている。

遺跡地を載せる台地は、北西から南東へ細長く延びるものであり、その幅は遺跡地北西部付近で約300m、南東部へ向かうに従って狭まり約150mとなっている。この台地は、遺跡地南東部から、さらに南東へ約300m延びて終っている。台地上には最も広いところで幅150m前後の平たん面をつくり、両側斜面へとつながっている。斜面は南西側が緩るく、北東側は比較的急である。台地両側には、南西側に武子川、北東側に姿川がそれぞれ南流しており、この両河川によってつくられた低地面が広がっている。台地上平たん部の標高が120m前後、南西側低地面の標高が105~106m、北東側低地面の標高が102~103mであり、南西側低地面がやや高くなっている。台地上と低地面の比高差は、平均して15·6mである。

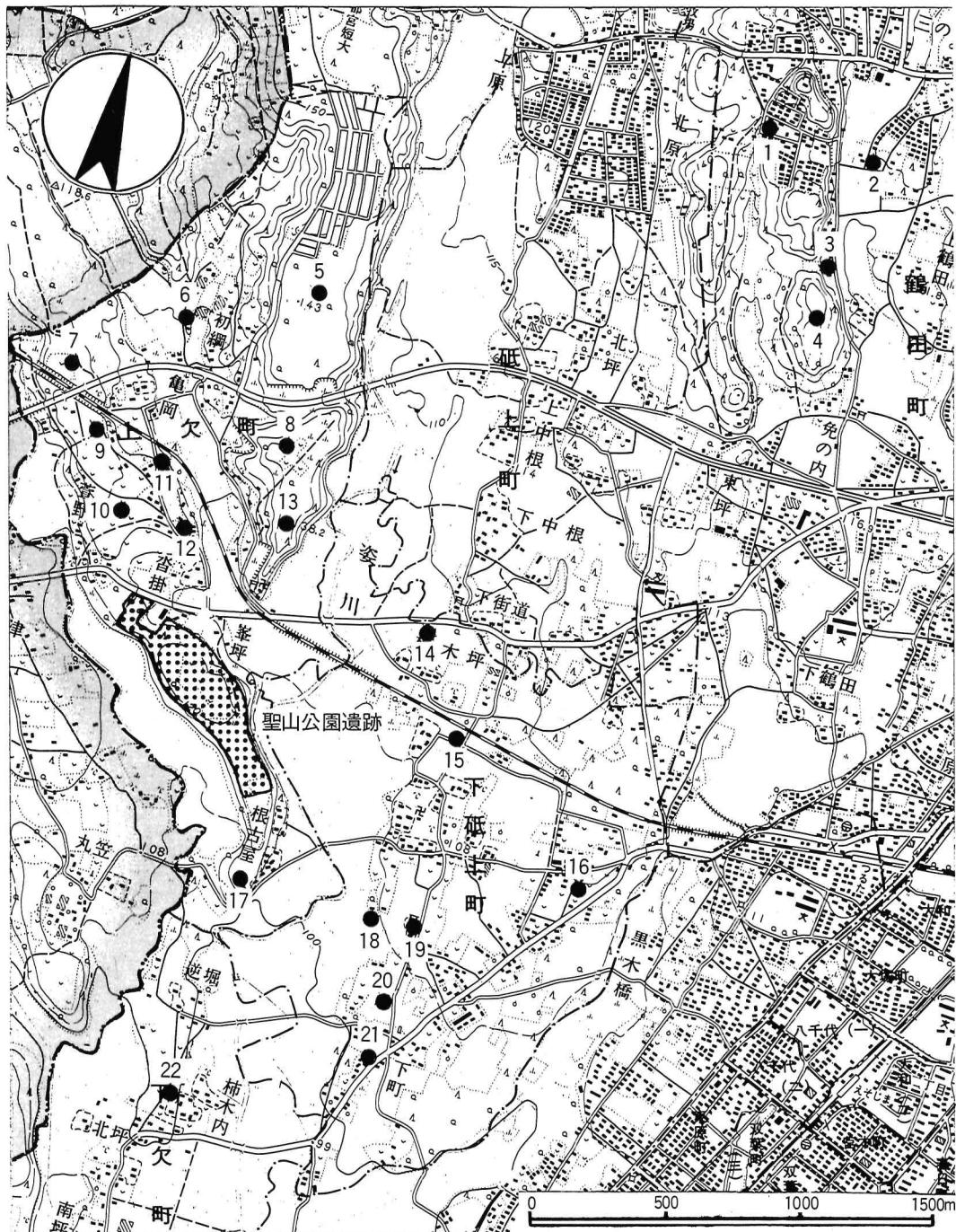
2. 歴史的環境

ここでは、周辺に分布する遺跡を概観することにより、聖山公園遺跡をめぐる歴史的環境(主に古代を中心とした)を考える際の一材料を提示するにとどめたい。また、その対象とする範囲についても、今回は姿川流域でしかも聖山公園遺跡から比較的近距離にあるものという狭い範囲に限定したい。

まず、姿川右岸の鹿沼台地に目をやると、北方には5・6・7などの縄文時代遺跡が多くみられ、やや南に下るに従って11・12・13それに聖山公園遺跡というように古墳時代遺跡が中心となってくる様相がみられる。一方姿川左岸の宇都宮西部台地においても同じ様相がみられ、北方には1・2のような縄文時代遺跡が、そして南の低地に下るに従って14・19・21などの古墳時代遺跡が多くなっている。

姿川の右岸にしても左岸にしても、大きくみれば地形は北から南(正確には南南東)へと除々に低くなっているわけであり、標高の高い北方台地には縄文時代遺跡が、そして南へと標高が下がってくるに従って古墳時代遺跡が多くなるということになる。さらに古墳時代遺跡、特に古墳自体(主に後期の円墳群である)についてみれば、聖山公園遺跡を中心として姿川沿岸に集中しているということも言えそうである。

なお、歴史時代(奈良・平安時代)に関しては良好な遺跡がみあたらないが、分布調査の



第3図 聖山公園遺跡周辺遺跡分布図

結果では、姿川右岸地域においてやや多く土器の散布がみられるようである。また、弥生時代遺跡については、現在のところ発見例がない。

最後に、発掘調査あるいは分布調査によって比較的その内容の明らかにされている遺跡について略述しておくこととする。

(註1)

2 羽黒下団地遺跡 姿川左岸台地上に立地。昭和43年ごろ団地造成に際して、袋状土

壙数基を検出。縄文時代中期後半。

(註2)

5 上欠団地遺跡 姿川右岸台地上に立地。昭和52～53年の発掘調査において、55軒の住居跡と土壙266基を検出。縄文時代中・後期。

6 初綱遺跡 姿川右岸低台地上に立地。多数の土器片が採集されている。縄文時代中期・後期・晚期。

(註3)

7 高尾神遺跡 姿川右岸台地上に立地。昭和49～50年の発掘調査において、住居跡19軒、袋状土壙11基などを検出。縄文時代中期。

4 亀が窪古墳群 姿川左岸台地上に立地。径13m～21mの円墳4基。直刀、刀子、須恵器などが出土。

11 亀岡古墳群 姿川右岸台地上に立地。径7m前後の円墳5基。直刀出土。

12 定使古墳 姿川右岸台地上に立地。径12mの円墳。

13 稲荷山古墳群 姿川右岸台地上に立地。全長25mの前方後円墳1基。径10m前後の円墳2基。前方後円墳からは円筒埴輪が出土。

14 植の内古墳 姿川左岸低台地上に立地。径11mの円墳。

(註4)

17 犬飼城跡 姿川と武子川の合流点のすぐ北側で、台地南端部に立地。本丸跡、二の丸跡、土橋跡、井戸跡などが残り、周囲には幅12m、深さ3～5mの堀がめぐっている。規模は、南北約200m、東西約150m。

19 下砥上愛宕塚古墳 姿川左岸低台地上に立地。推定径25mの円墳。切石積みの横穴式石室。玄室長3.65m、同幅1.85m、同高1.9m。

21 下砥上古墳群 姿川左岸低台地上に立地。全長20mの前方後円墳(?)1基。円墳2基。

石室天井部が露呈。円筒埴輪、須恵器片、直刀などが出土したと伝えられる。

(参考文献)

註1・塙 静夫「羽黒下団地遺跡」『宇都宮市史 第一巻』 昭和54年3月。

註2・八巻一夫「上欠団地遺跡の集落構成」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』 昭和54年3月。

註3・大川 清「高尾神遺跡」『栃木県史・資料編・考古一』 昭和51年3月。

註4 『栃木県の中世城館跡』 栃木県教育委員会 昭和57年3月

III 遺跡地の植物分布

宇都宮市内の外周部の洪積台地及び低丘陵には、今なおかなりの面積が森林として現存しているが、最近は宅地・工場用地としてこの森林を開発し、時には地形そのものを改造してしまっている。

森林は、豊かな土壤と動物を育てる場であるだけでなく、人間にとっても欠くことができないものである。この森林を無計画に開発することは慎しむべきであり、その存続に特別の配慮が一層必要である。

しかし、残念ながら埋蔵文化財の発掘調査も特別の場合を除いて地上に繁茂する草木を根こそぎ抹消する結果になる。しかも、聖山公園の場合は、遺跡地のみならず造成にかかる部分の植物はほとんど消滅してしまう。もちろん、造成地は公園基地として、新たに緑地が設けられるが、造成前の植生は一変してしまう。

そこで、発掘調査に先だって公園造成地全体について、植物の分布調査を実施しその概要を記録にとどめることにした。

遺跡地を含む造成地の植生状況を一言でいうと、コナラ、アカマツの混交林ということができる。一部にヒノキ・サワラ等が境界樹として植林されているが、全体的にはいわゆる雑木林の状態を呈している。

コナラ林における樹木の種類は、コナラの他アカシデ・リョウブ・エゴノキ・アズマネザサ・アオハダなどが多く、次いでウリカエデ・ネジキ・ヤマウルシが散在しさらにコシアブラが点在する。下草としては、ヤマホトトギス・チゴユリ・タガネソウ・シラヤマギク・コウヤボウキ・オトコヨウゾメ・ガマズミ・フジ・コゴメウツギなどが見られる。

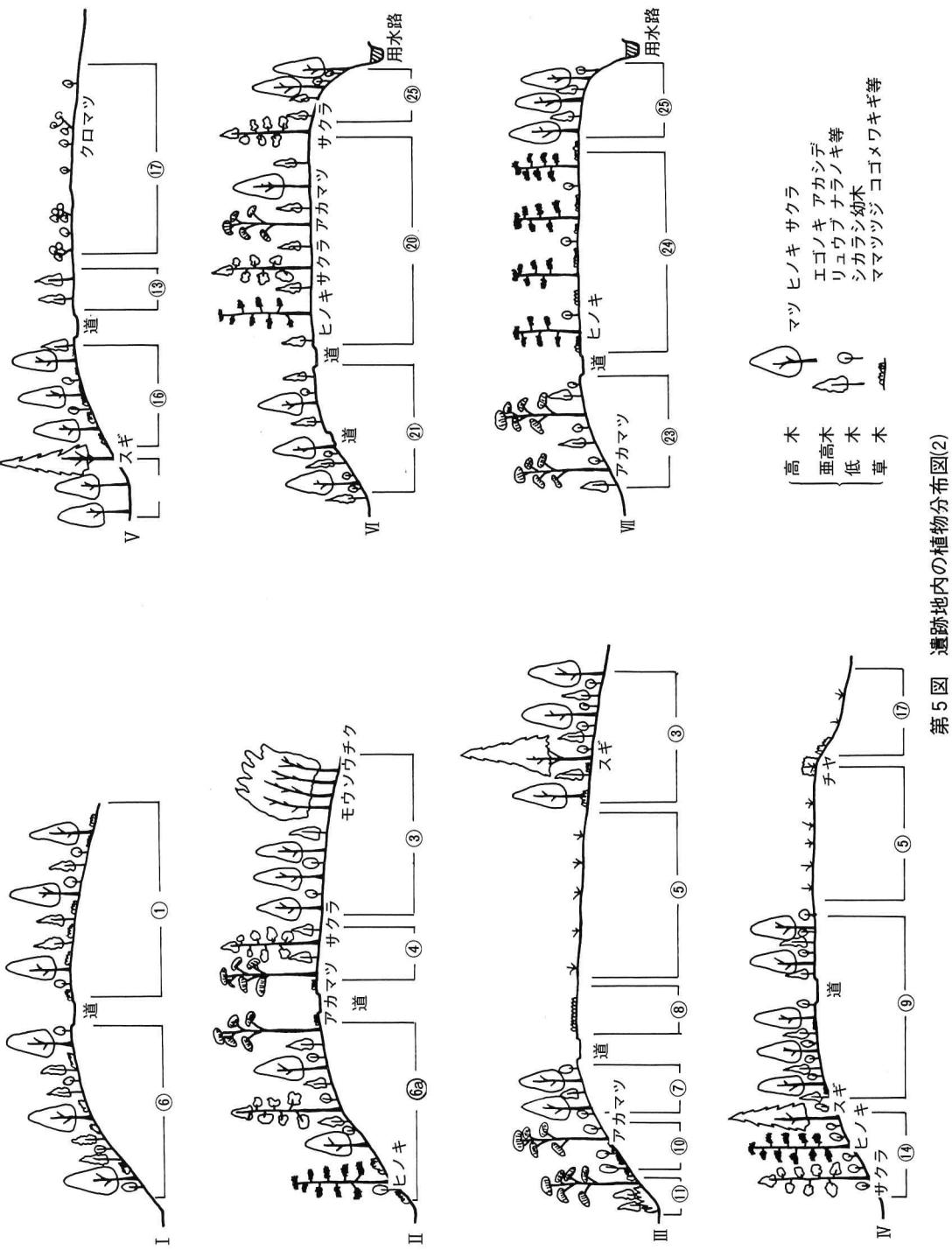
アカマツ林については、高木層にアカマツ、亜高木層にコナラ・アカシデ・リョウブ・エゴノキ・アオハダ・ウリカエデが見られる。低木層としてはオトコヨウゾメ・ガマズミ・ヤマウルシ・ヤマツツジ及びシラカシ・ヒサカキの幼木が多い。なお、低木層としてあまりヤマツツジが見られないのは、庭木として人々に採取されてしまった為と思われる。

以上が調査対象地の植生の概況であるが、南北に連なる姿川右岸の他の洪積台地とその植生は大同少異であるといえる。ただ、地内にコウヤボウキとゼンティカの群生地がそれぞれ一か所あることを付記する。

なお、個々の植物の分布状況は、次の表と図（第4・5図）の通りである。

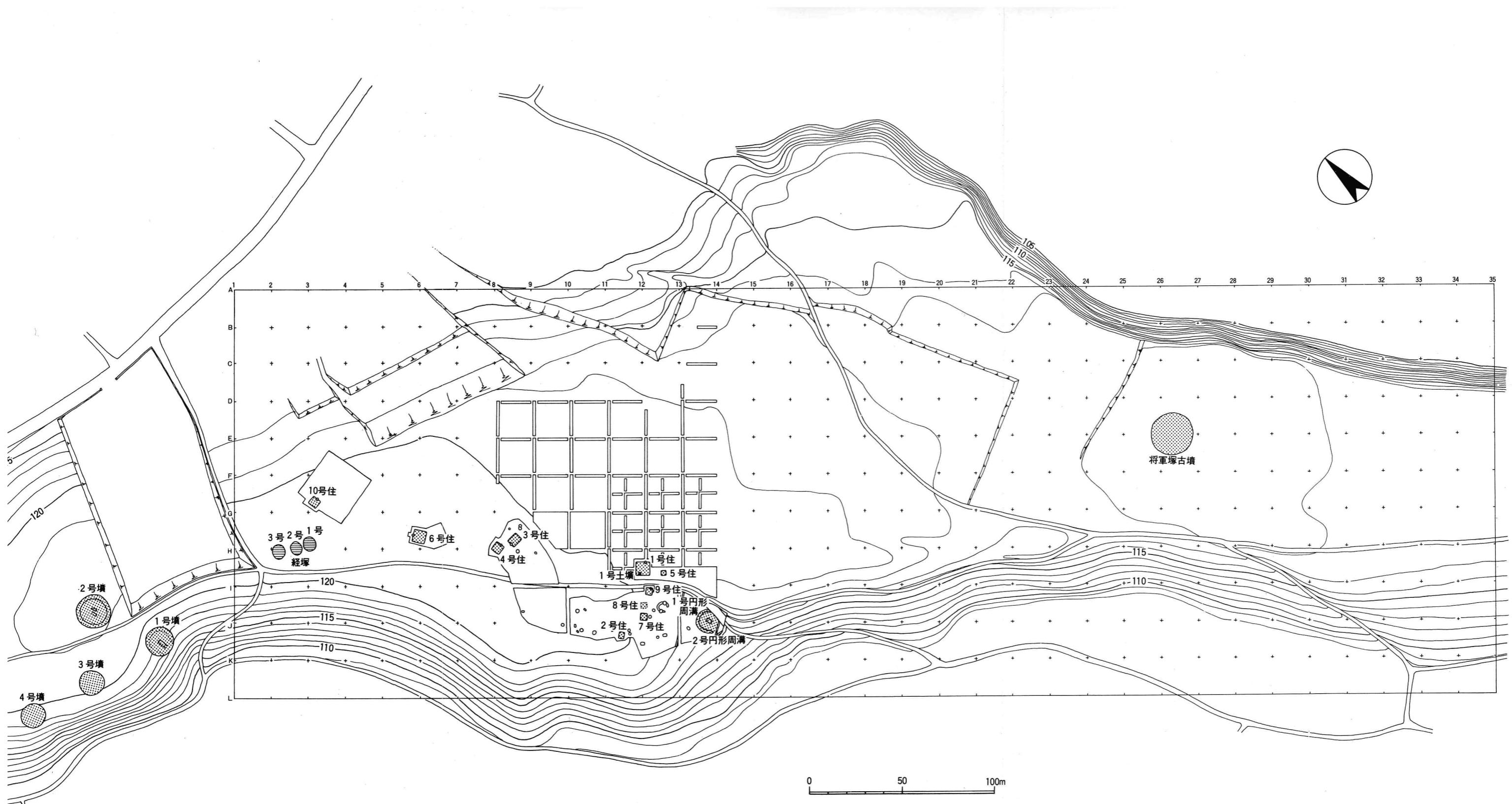
第4図 遺跡地内の植物分布図(1)





第5図 遺跡地内の植物分布図(2)

聖山公園建設地內植物分布表



第6図 聖山公園遺跡遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

今年度の調査で検出された遺構は、円墳2基、竪穴住居跡10軒、各種土坑23基、円形周溝遺構2基、および経塚3基である。（第6図）円墳は調査地区内北東部に4基集中して確認されたものであるが、このうち公園進入道路にかかる1号墳と2号墳を全面調査した。1号墳は横穴式石室を有する円墳、2号墳は木棺直葬と思われる円墳であった。竪穴住居跡は総て古墳時代に属するものであり、10軒のうち6軒（1号、3号、4号、6号、9号、10号住居跡）はカマドが付設されているものであった。土坑は形状的には円形、長方形の2種類に大別されるが、時期的には不明なものが多く、僅かに1号土壙が縄文式土器の出土により判断できたに過ぎない。古墳時代に属するものも相当数あるものと思われる。円形周溝遺構は2基とも伴出した土器により古墳時代に属するものと考えられる。2号円形周溝の中央部で埋葬主体と思われる長方形土壙が検出されており、古墳としての意味合いが濃いものと考えられる。

ここでは、前記した各種遺構のうちより、1号土壙、1号住居跡、2号住居跡、3号住居跡、4号住居跡、1号墳、2号墳、および経塚について、それぞれの遺構の状態や伴出遺物などの報告を行なうこととする。

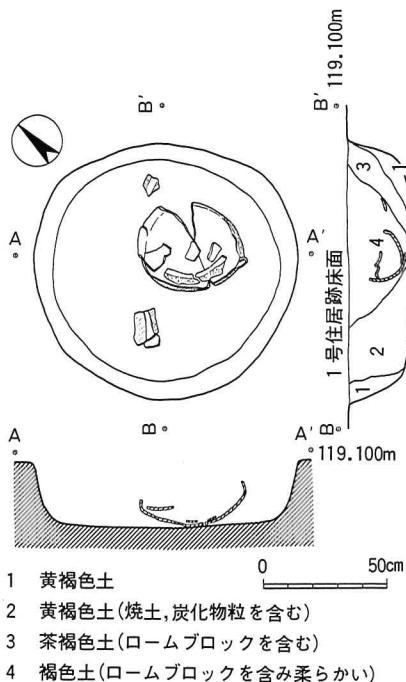
1. 土 壙 （縄文時代）

1号土壙

遺構 1号住居跡の床面下より検出されたものである。形状は円形で、直径1.07m、1号住居跡床面からの深さ0.27mを測る。土壙底面は、ほぼ平たんとなる。覆土はロームブロックを含む層が多く、全体に柔らかい。また底面近くでは、焼土や炭火物粒の混入が目立って認められた。

土器は土壙底面の中心からややずれた位置に正立した状態で検出された。

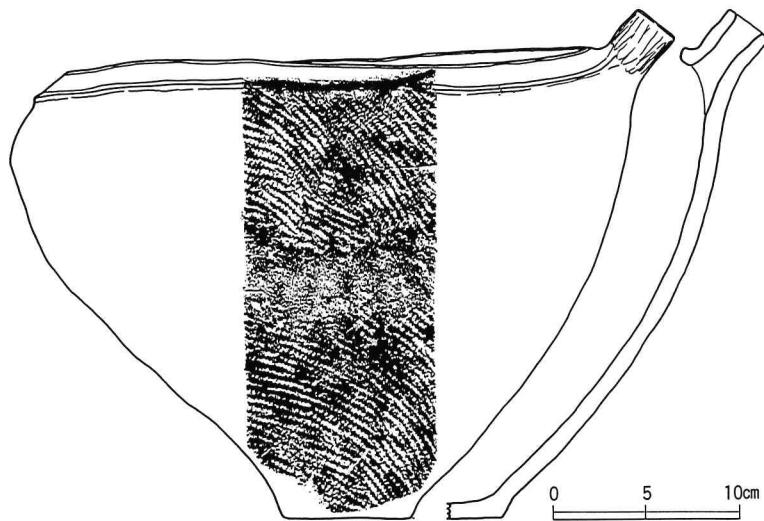
遺物 検出された土器は、注口土器の完成品である。口径28cm、器高24cmの浅鉢形のものであり、注口は口縁部から外上方へ延びている。



第7図 1号土壙実測図

口縁部と胴部は、一条の隆帯で区画され、口縁部は無文、胴部にはLR繩文が全面に施されている。

胴部外面は二次焼成を受けており、特に中程には、スス状の炭火物が帶状にこびり着いている。外面黒褐色、内面赤褐色を呈す。



第8図 1号土壤出土繩文式土器実測図

2. 住居跡 (古墳時代)

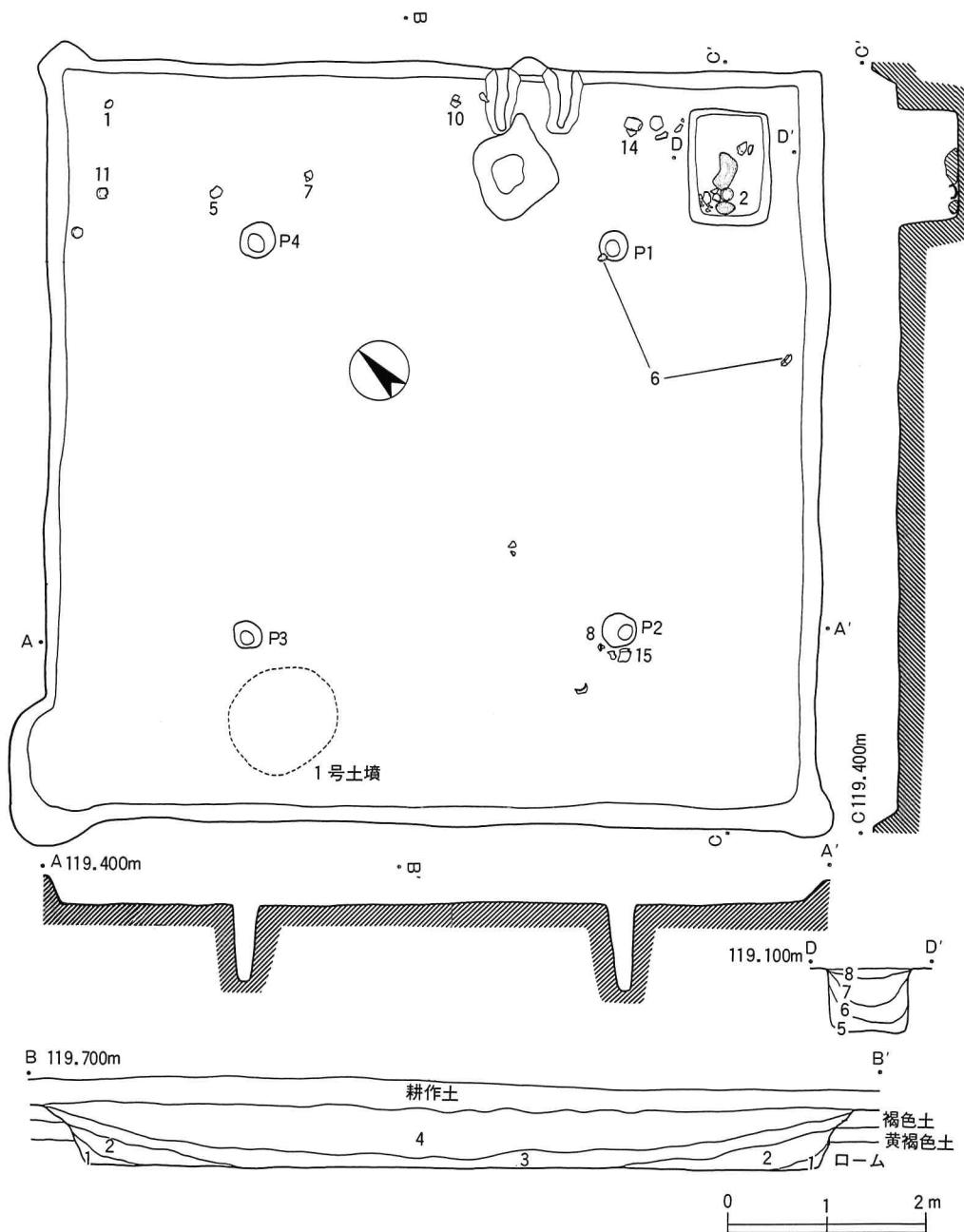
1号住居跡

遺構 本住居跡は台地上平たん部の縁辺部付近で、南側に緩斜面を望む場所に位置する。平面形は7.6×7.7mのほぼ正方形を呈するものであり、今年度検出された竪穴住居跡の中では、最も大形のものである。壁は確認面から約60cm（現表土からは約80cm）切り込んで掘られており、70°ほどの傾斜をもって立ち上がっている。壁から床面へは直接移行し壁下をめぐる周溝のような施設は認められない。

床面はロームであり、中央部からカマド前面にかけては特によく踏み固められている。また床面のレベルはほぼ一定であるが、壁際は心もち高くなっているようである。柱穴は、主柱穴の4本が検出されている。4本ともほぼ対角線上に位置し、柱間は約3.8mを測る。各柱穴の深さは、次のとおりである。P₁-84cm。P₂-87cm。P₃-79cm。P₄-81cm。

貯蔵穴は住居跡の東隅に位置し、カマド右袖から約1.2mの距離にある。平面形は、横80cm、縦120cmの長方形を呈し、60cmほどの深さがある。覆土は住居跡の覆土に近く、住居跡とともに埋没したものと考えられる。

カマドは北東壁の中央よりやや南に寄った位置に付設されている。大きさは、幅95cm、奥行き65cmを測る。焚口部には中心よりやや北にずれた位置に深さ10cm程の掘り込みがある。煙道部の壁への切り込みは、確認された範囲では非常に僅かであり、壁立ち上がりの



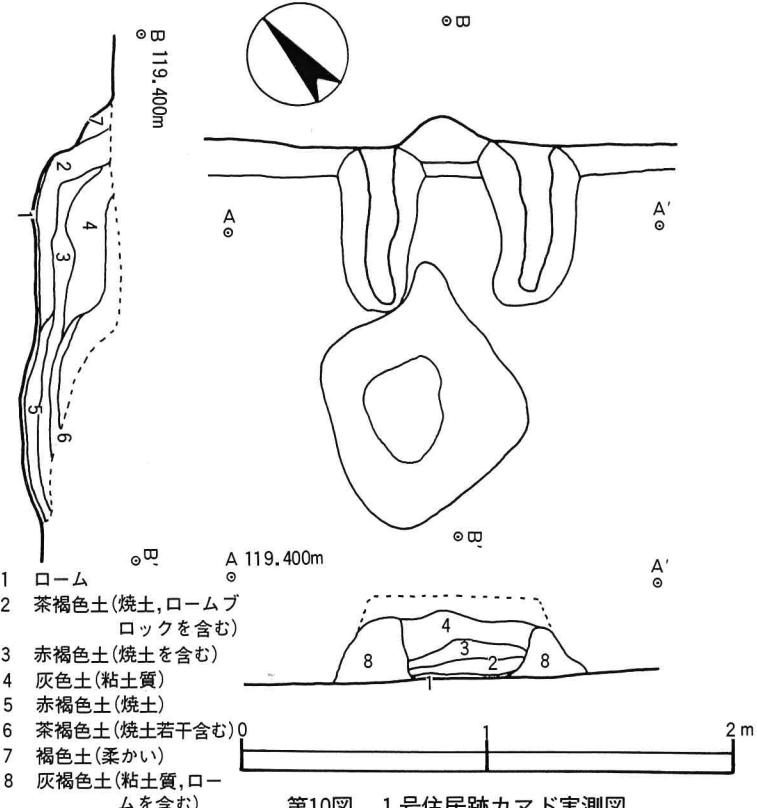
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 黄色土(ロームブロックを含む) | 5 黄褐色土(粘性有り) |
| 2 黄褐色土(小ロームブロックを含む) | 6 褐色土(ローム粒を多く含む) |
| 3 茶褐色土(ローム粒を含む) | 7 黒色土 |
| 4 黒色土(ローム粒を若干含む) | 8 茶褐色土(ローム粒を含み粘性有り) |

第9図 1号住居跡実測図

下半部をそのまま残している。袖はロームと粘土を混合したものを材料として構築されている。

住居跡の覆土は4層に分かれ、ほぼレンズ状の堆積を示している。

遺物 本住居跡から出土したものは、土師器と須恵器である。床面直上から出土したものは、1, 8, 10, 14, 15の5点と少なく、しかも完形品は14ぐらいである。出土位置とし



第10図 1号住居跡カマド実測図

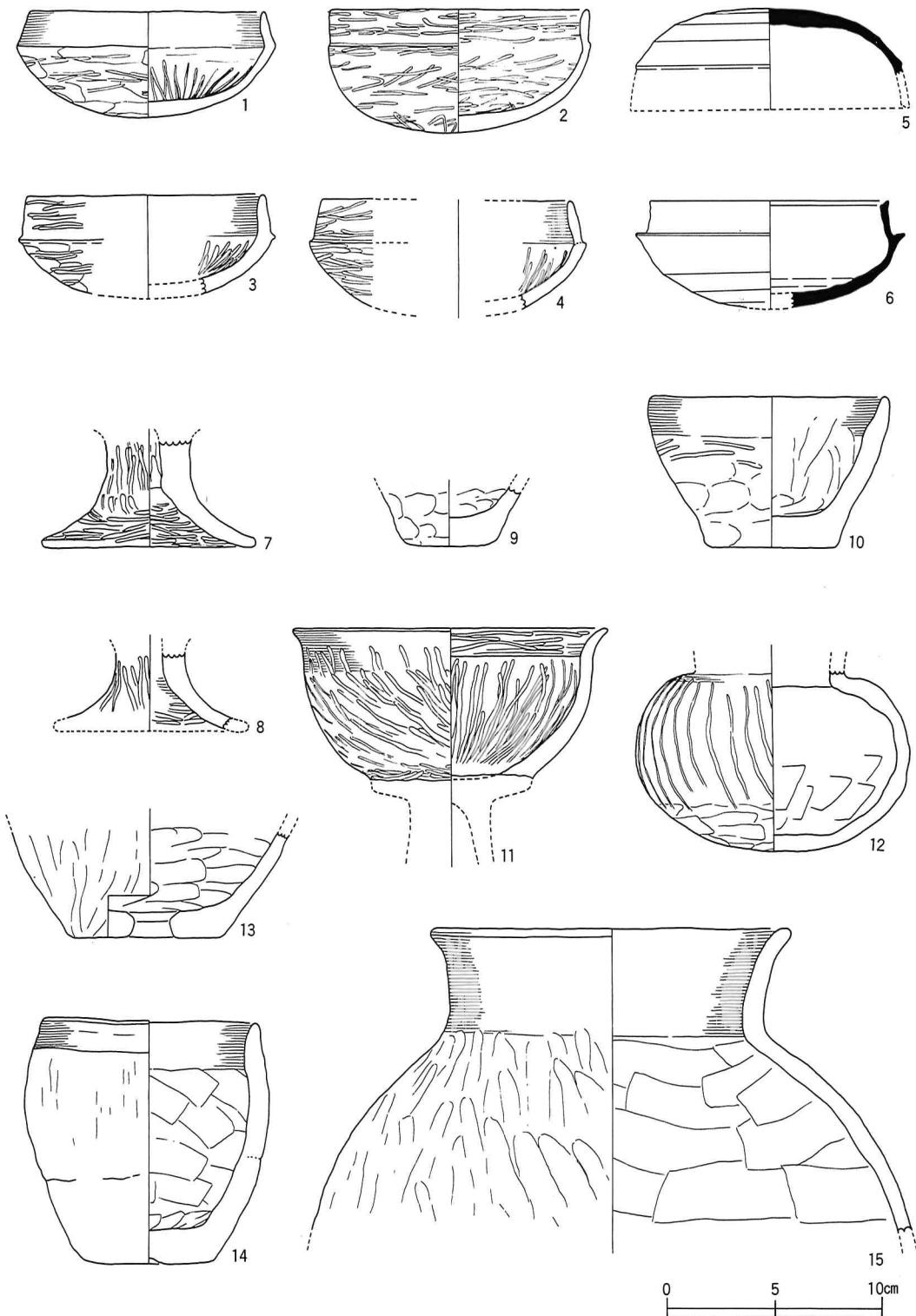
ては、カマドと貯蔵穴の周辺、および柱穴P₂の周辺に多い。6は須恵器の壊であるが、床面直上と覆土中の破片が結合したものである。また5の須恵器蓋は、覆土中より出土したものである。

貯蔵穴内からは、2の土師器壊と大小2個の川原石が出土している。いずれも貯蔵穴の底面に着いての出土である。貯蔵穴内よりの川原石の出土は、本遺跡内の住居跡においてしばしば確認されることである。

なお、本住居跡の出土土器数をみると、他の住居跡と比較した場合、大きさのわりには少ないように思われる。

1号住居跡出土土器説明表

番号	器種 (残存量)	法量	器形の特徴	整形の特徴		器質	出土位置その他
				内面	外面		
1	土師器 (壊) (3/3)	10.8 4.9 •	外面に稜を有す。口縁部は内傾。	口縁部横ナデ。底面は、放射状ヘラ磨き。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。体部に粗いヘラ磨き。	やや粗い砂粒を含む胎土。淡赤褐色。	床面直上。
2	土師器 (完形)	11.8 5.6 •	外面に稜を有す。口縁部は直立。	全面ヘラ磨き。口縁部は横位、他は不定方向。	全面ヘラ磨き。口縁部は横位、他は不定方向。	精製された胎土。焼成良好。赤褐色で光沢有り。	貯蔵穴床面直上。赤彩。



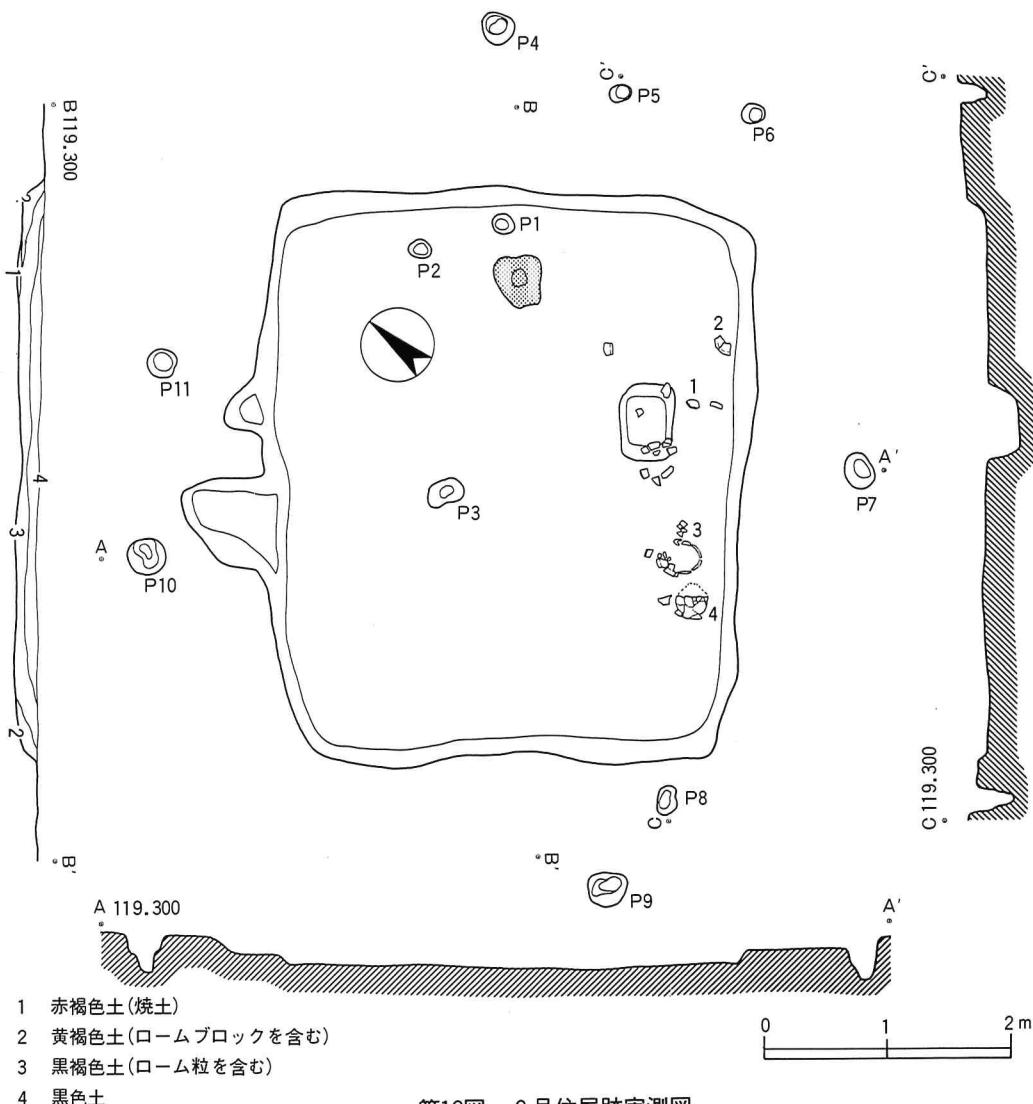
第11図 1号住居跡出土土器実測図

3	土師器 壺 ($\frac{1}{5}$)	(10.8) (4.8) 。	外面に鋭い稜を有す。 口縁部は内傾。	口縁部横ナデ。底 面ヘラ磨き。(放射 状か?)	全面粗い横位のヘ ラ磨き。(ただし底部 は不明)	精製された胎土。 焼成良好。赤褐色。	覆土中。
4	土師器 壺 ($\frac{1}{4}$)	(11.5) (5.5) 。	外面に鋭い稜を有す。 口縁部は内傾。貼り付 け口縁。	口縁部横ナデ。底 面は、放射状ヘラ 磨き。	全面横位のヘラ磨 き。(ただし底部は 不明)	精製された胎土。 焼成良好。淡橙褐 色。	覆土中。
5	須恵器 蓋 ($\frac{1}{2}$)	(13.7) (4.6)	天井部と口縁部を分ける 稜の端部に鋭どさが 欠ける。	ロクロなで。 右回転ロクロ使用。	ロクロなで。 天井部は、約 $\frac{1}{2}$ を 回転ヘラ削り調整。	砂粒を多く含む胎 土。暗い灰色。	覆土中(床面 上15cm)
6	須恵器 壺 ($\frac{2}{3}$)	11.0 (5.0) •	たち上がり端部は内傾 する平坦面。	ロクロなで。 左回転ロクロ使用。	ロクロなで。 底部は、約 $\frac{1}{2}$ を回 転ヘラ削り調整	精製された胎土。 焼成良好。灰色。	床面直上と覆 土中の破片が 結合。
7	土師器 高壺 ($\frac{1}{3}$)	— — 9.5	脚部のみ。	全面横位のヘラ磨 き。	脚柱部は縦位、裾 部は横位のヘラ磨 き。	精製された胎土。 焼成良好。淡い赤 褐色。	覆土中(床面 上15cm)
8	土師器 高壺 ($\frac{1}{4}$)	— — (9.0)	脚部のみ。	横ナデ。裾部近く は横位のヘラ磨き。	縦位のヘラ磨き。	精製された胎土。 焼成良好。暗赤褐 色。	床面直上。
9	土師器 壺 ($\frac{1}{2}$)	— — 4.2	底部は平底。器面に凹 凸有り。	手づくね。	手づくね。	砂粒を多く含む胎 土。茶褐色。	覆土中。
10	土師器 壺 ($\frac{1}{5}$)	10.6 7.0 5.7	底部は平底。器肉が厚 い。	口縁部横ナデ。他 はヘラ削り。	口縁部横ナデ。体 部は手づくね。底 部はナデ。	小砂粒を多く含む 胎土。焼成不良。 灰褐色。	床面直上。
11	土師器 高壺 ($\frac{1}{2}$)	14.4 — —	口縁部は短かく外反し 内面に軽い稜をつける。 脚部欠損。	口縁部が横位、体 部が放射状のヘラ 磨き。	口縁部横ナデ。他 は斜位のヘラ磨き。	砂粒を少し含む胎 土。焼成良好。赤 褐色。	覆土中(床面 上50cm) 赤彩。
12	土師器 壺 ($\frac{1}{5}$)	12.9	口縁部欠損。	底部近くは横位の ヘラなで。	胴部上半縦位の暗 文風ヘラ磨き。他 はヘラ削り。	粗い砂粒を含む胎 土。外面赤褐色， 内面黒褐色。	覆土中。
13	土師器 甌 ($\frac{1}{4}$)	— — 6.5	底部中央に径2cmの円 孔有り。	横位のヘラなで。	縦位のヘラなで。	粗い砂粒を含む胎 土。外面暗褐色， 内面赤褐色。	覆土中。
14	土師器 甌 (完形)	9.6 11.2 5.4	底部中央部に凹有り。 器肉が厚い。	口縁部横ナデ。体 部ヘラ削り。底面 指なで。	口縁部横ナデ。縦 位のなで。	粗い砂粒を多く含 む胎土。焼成不良。 淡褐色。	床面直上。
15	土師器 甌 ($\frac{1}{5}$)	16.2 — —	頸部が直立気味に開く。 胴部は球形。	口縁部横ナデ。胴 部横位のヘラなで。	口縁部横ナデ。胴 部縦位のヘラなで。	砂粒を多く含む胎 土。淡い黄褐色。	床面直上。

2号住居跡

遺構 本住居跡は台地縁辺部に位置し、すぐ南西側が緩斜面となっている。平面形は、 $4.6\text{m} \times 3.9\text{m}$ の長方形である。比較的掘り込みが浅い竪穴住居跡であり、確認面からの深さは、 $17 \cdot 8\text{cm}$ である。全体に遺存状態は良好でなく、壁面の崩れや線の歪みが目立っている。床面はロームで、凹凸が目立ち、踏み固められた様子もあまり認められない。

柱穴らしきものは竪穴内にいくつか検出されたが、4住穴は確認されない。むしろ、竪穴外に柱穴が掘られていたようであるが、整然とは並んでいない。主な柱穴の深さは、次のとおりである。 $P_1 - 39\text{cm}$ 。 $P_2 - 36\text{cm}$ 。 $P_3 - 48\text{cm}$ 。 $P_4 - 50\text{cm}$ 。 $P_5 - 34\text{cm}$ 。 $P_6 - 42\text{cm}$ 。 $P_7 - 35\text{cm}$ 。 $P_8 - 35\text{cm}$ 。 $P_9 - 42\text{cm}$ 。 $P_{10} - 33\text{cm}$ 。 $P_{11} - 21\text{cm}$ 。



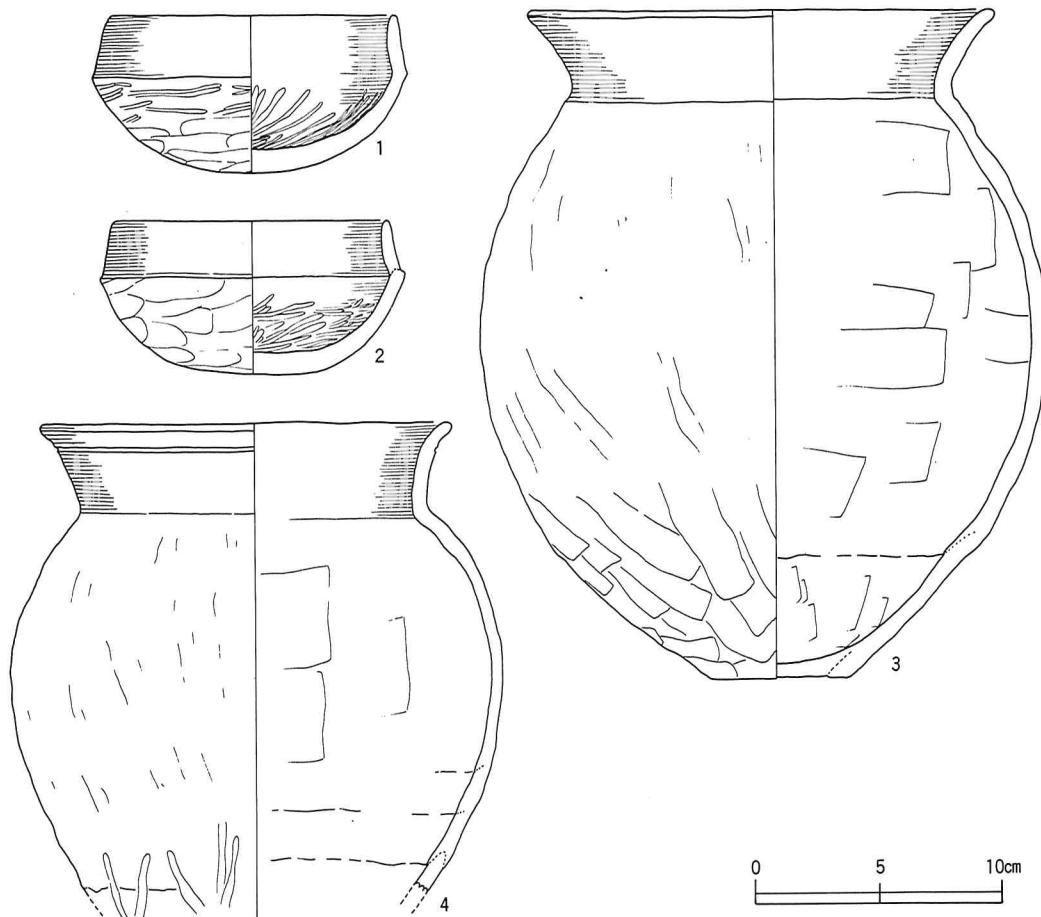
第12図 2号住居跡実測図

貯蔵穴は南東壁近くに位置する。平面形は60cm×40cmの長方形で、深さは25cmを測る。カマドは付設されておらず、炉跡と思われる浅い掘り込みが北西壁近くに検出されている。掘り込みは、径40~50cmの不整円形で深さは4・5cmのものであり、内部からは全体に焼土が検出されている。

住居跡内の覆土は3層に分かれ、ほぼレンズ状の堆積を示している。

遺物 本住居跡より出土したものは、総て土師器である。出土位置は東南壁と貯蔵穴の周辺に集中しており、図示した4点はいずれも床面直上で検出されたものである。3と4の壺形土器は、南東壁近くに倒れ破碎した状態で検出されたものである。壁際に2個並んで立てられていたものと思われる。

図示し得た土器は、壺2点(1・2)、甕2点(3・4)の4点である。甕は2点とも二次焼成を強く受けたものとみられ、胴部外面に著しく炭火物が付着し、器壁もかなりもろくなっている。



第13図 2号住居跡出土土器実測図

2号住居跡出土土器説明表

番号	器種 (残存量)	法量	器形の特徴	整形の特徴		器質	出土位置その他
				内面	外面		
1	土師器 壺 (%)	11.2 6.4 •	外面に軽い稜を有し、口縁部は内傾。	口縁部横ナデ。底面は、放射状ヘラ磨き。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。体部に横位のヘラ磨き。	微砂粒を含む胎土。焼成良好。淡い赤褐色。	床面直上。
2	土師器 壺 (完形)	10.8 6.2 •	外面に鋭どい稜を有し、口縁部は内傾。口縁部は貼り付け。	口縁～体部横ナデ。底面ヘラ磨き。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。	微砂粒を含む胎土。焼成良好。茶褐色。	床面直上。
3	土師器 甕 (%)	18.5 26.7 5.4	口縁部は「く」の字に外反。胴部最大径(22.9)は、やや上位。	口縁部横ナデ。胴部横位のヘラなで。	口縁部横ナデ。胴部下半は縦位のヘラ削り。他はナデ。	砂粒を多く含む胎土。暗褐色。	床面直上。胴部外面炭化物付着。
4	土師器 甕 (%)	16.2 — —	頸部はやや直立気味。胴部最大径(19.7)は、肩部近く。口縁部外面に一条の沈線。	口縁部横ナデ。胴部横位のヘラなで。	口縁部横ナデ。胴下半に縦位の粗いヘラ先なで。他はない。	砂粒を多く含む胎土。暗褐色。	床面直上。胴部外面に炭化物付着。

3号住居跡

遺構 本住居跡は台地上平たん部内でやや南西よりに位置し、南西緩斜面に至る縁辺部までは約50mの距離がある。平面形は4.7m×6.1mの東西に長い長方形を呈する。

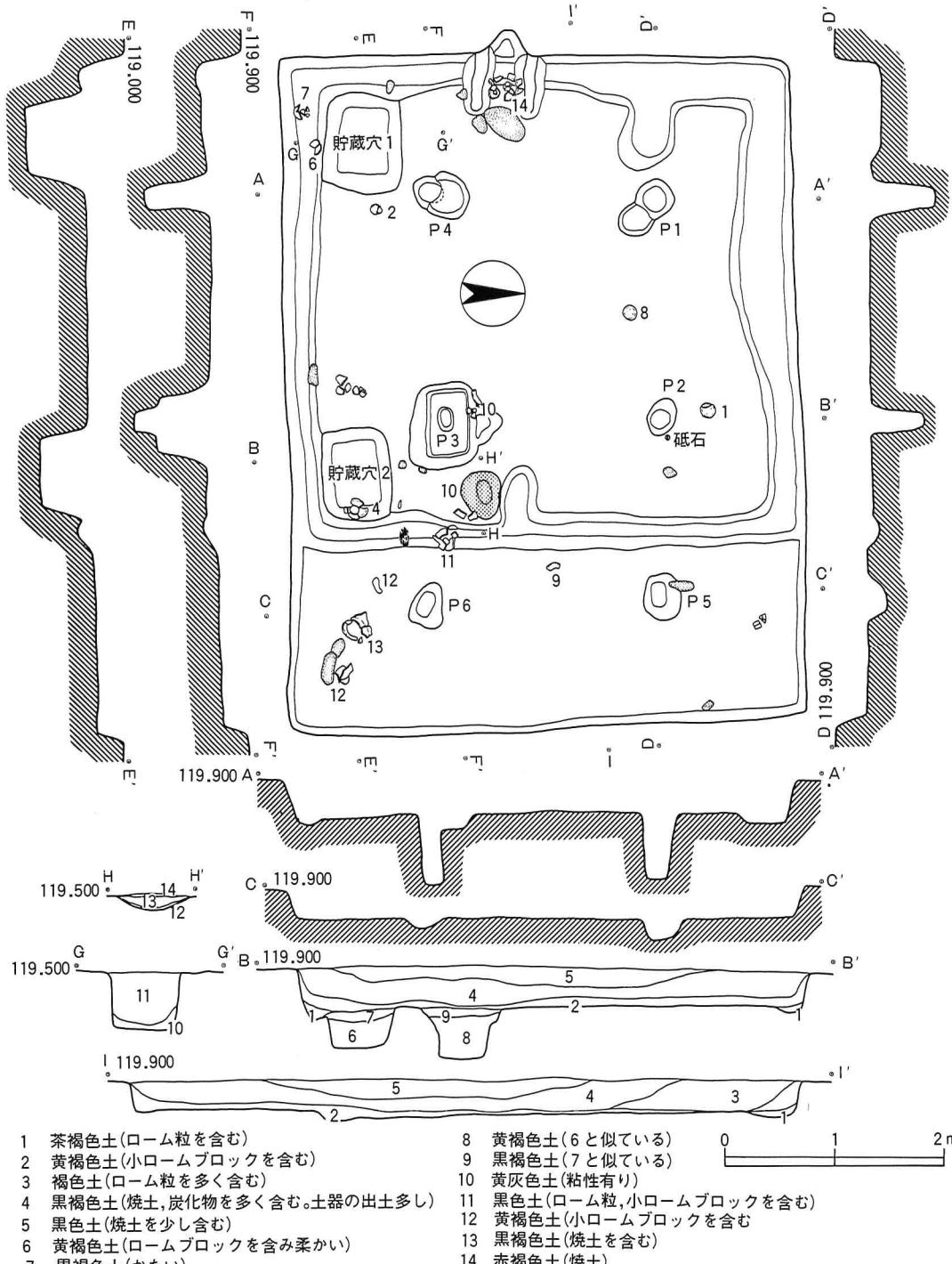
本住居跡はある段階で東壁側を拡張した住居跡であると考えられる。その理由としては周溝がほぼ正方形に回っていること、拡張部と思われる部分の床が1段高くなっていること、さらに拡張部と思われる部分の柱穴が浅いものであり、補助的なものとみられることなどの点が挙げられる。また、2基検出された貯蔵穴の内、貯蔵穴2が人為的に埋められ上層が床面となっているのに対し、貯蔵穴1は住居跡とともに埋没していること、さらに西壁に付設されたカマドの下に周溝が回っていることなどは、住居跡の拡張時に各施設の造り替えがあったことを示しているものと思われる。

拡張前の本住居跡は、4.5m×4.7mのほぼ正方形に近い平面形を呈し、確認面からは約35cmの深さをもっている。4柱穴は対角線上に位置するしっかりしたものであるが、P₃だけは最初の掘り方が方形となっている。各柱穴の深さは、次のとおりである。P₁—59cm。P₂—49cm。P₃—65cm。P₄—57cm。拡張前の段階では東南隅に位置する貯蔵穴2が使用されていたと思われる。また、東周溝(拡張前の東壁)際に焼土を多量に出土する深さ10cm前後の掘り込みが検出されている。拡張前段階のカマド(あるいは炉か?)跡と思われる。

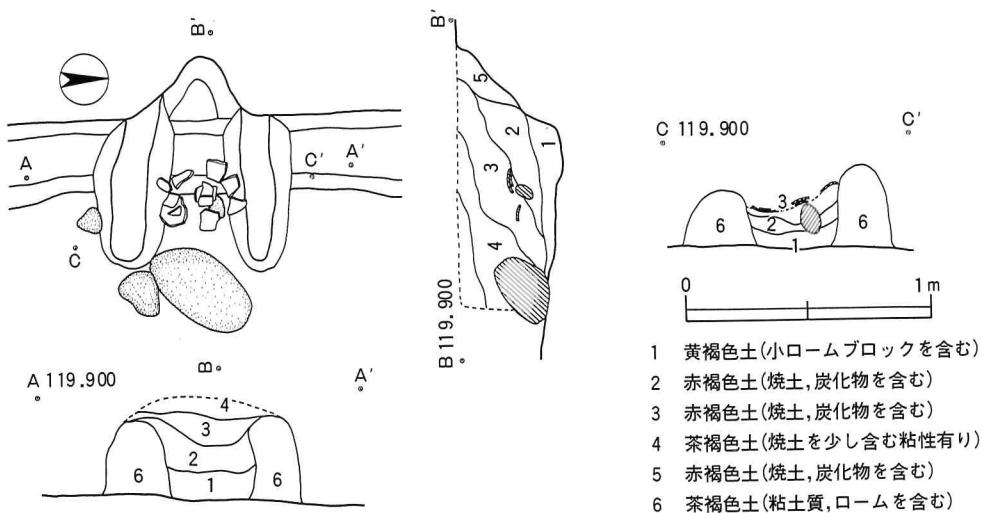
拡張に際して西壁にカマドが付設されたようであるが、これに伴って貯蔵穴2が埋められ、新たにカマド左袖の南西隅に貯蔵穴1が設けられたようである。

カマドは西壁でやや南よりに位置する。袖は粘土とロームを混合したものを使用して構

築され、焚口部正面は川原石で補強されている。掛け穴部と思われる部分に甕の頸部がつぶれた状態で検出されているが、これは掛け穴を内側から補強する目的で、内部に取り付けられたものようである。



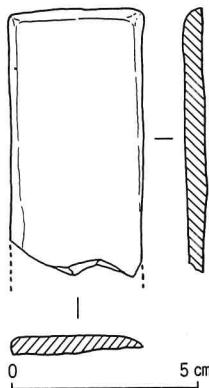
第14図 3号住居跡実測図



第15図 3号住居跡カマド実測図

遺物 本住居跡より出土した遺物は、土師器と砥石である。床面直上から検出されたものは極めて少なく、4の壺、8の壺、および11の甕の3点である。他は総て覆土中の出土であるが、特に南東隅から貯蔵穴2の周辺に集中している。いずれもかなり破碎された状態であり、いっしょに川原石などの散乱も認められる。ある程度住居跡の埋没が進行した段階で、投げ込まれたような印象が強いようである。

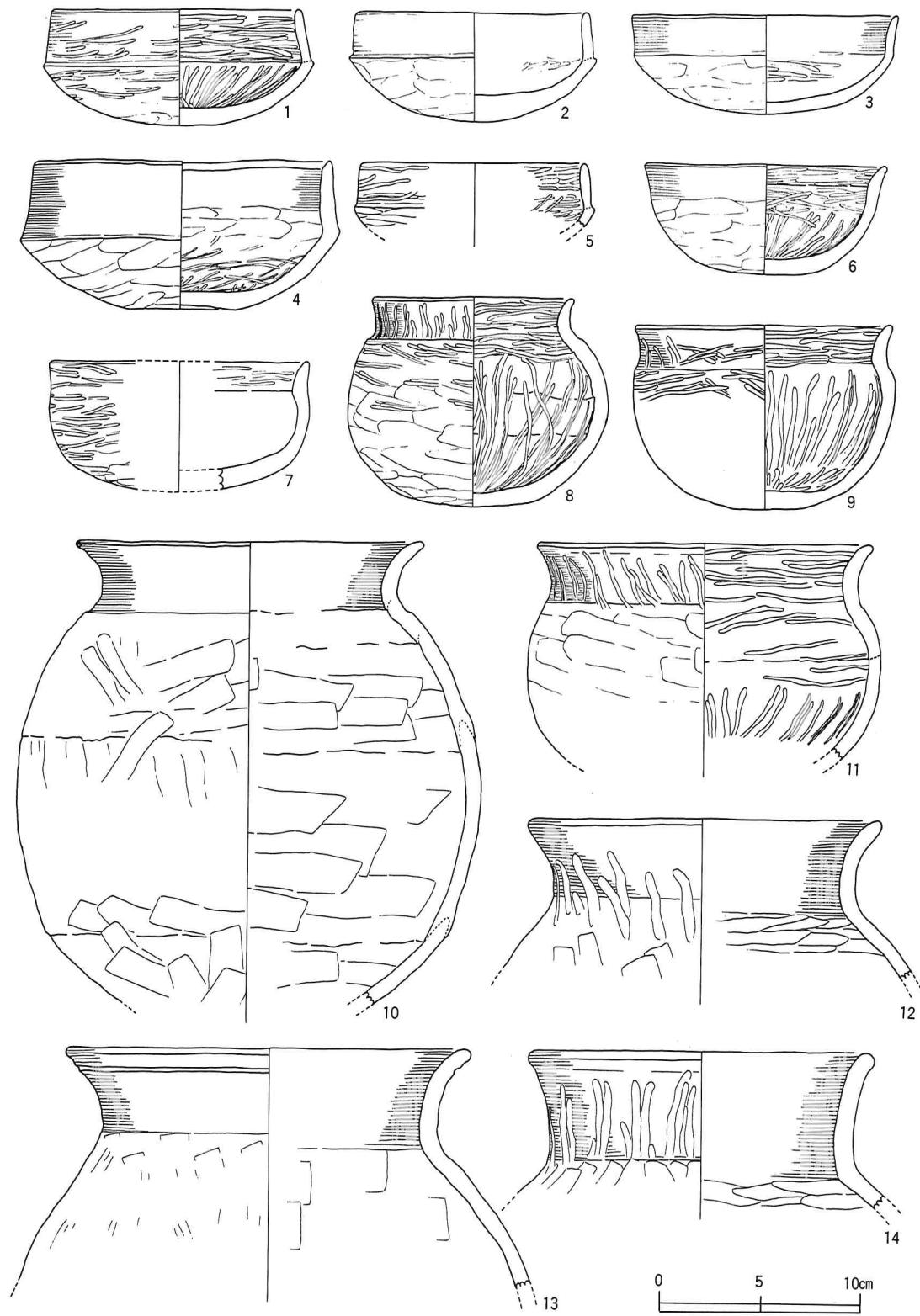
砥石は、P₂のすぐ近くで床面より数センチ程浮いたところより検出された。片面だけを使用したものである。



第16図 3号住居跡出土
砥石実測図

3号住居跡出土土器説明表

番号	器種 (残存量)	法量	器形の特徴	整形の特徴		器質	出土位置その他
				内面	外面		
1	土師器 壺 (完形)	12.2 5.8	外面に稜を有す。口縁部は内傾。口縁は貼り付け。底部が厚手。	口縁部が横位、底面が放射状の密なヘラ磨き。	口縁から体部上半横位のヘラ磨き。他はヘラ削り。	小砂粒を含む胎土。焼成良好。褐色。	覆土中(床面上10cm)
2	土師器 壺 ($\frac{1}{3}$)	11.2 5.4	外面に鋸い稜を有す。口縁部は内傾。口縁は貼り付け。底部が厚手。	口縁部横ナデ。底面はヘラ磨き。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。	小砂粒を含む胎土。焼成不良。明褐色。	覆土中(床面上43cm)
3	土師器 壺 ($\frac{1}{3}$)	13.0 4.9	外面に稜を有す。口縁部は外傾。	口縁部は横ナデ。底面はヘラ磨き。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。	砂粒を含む胎土。焼成不良。褐色。	覆土中(床面上10cm)



第17図 3号住居跡出土土器実測図

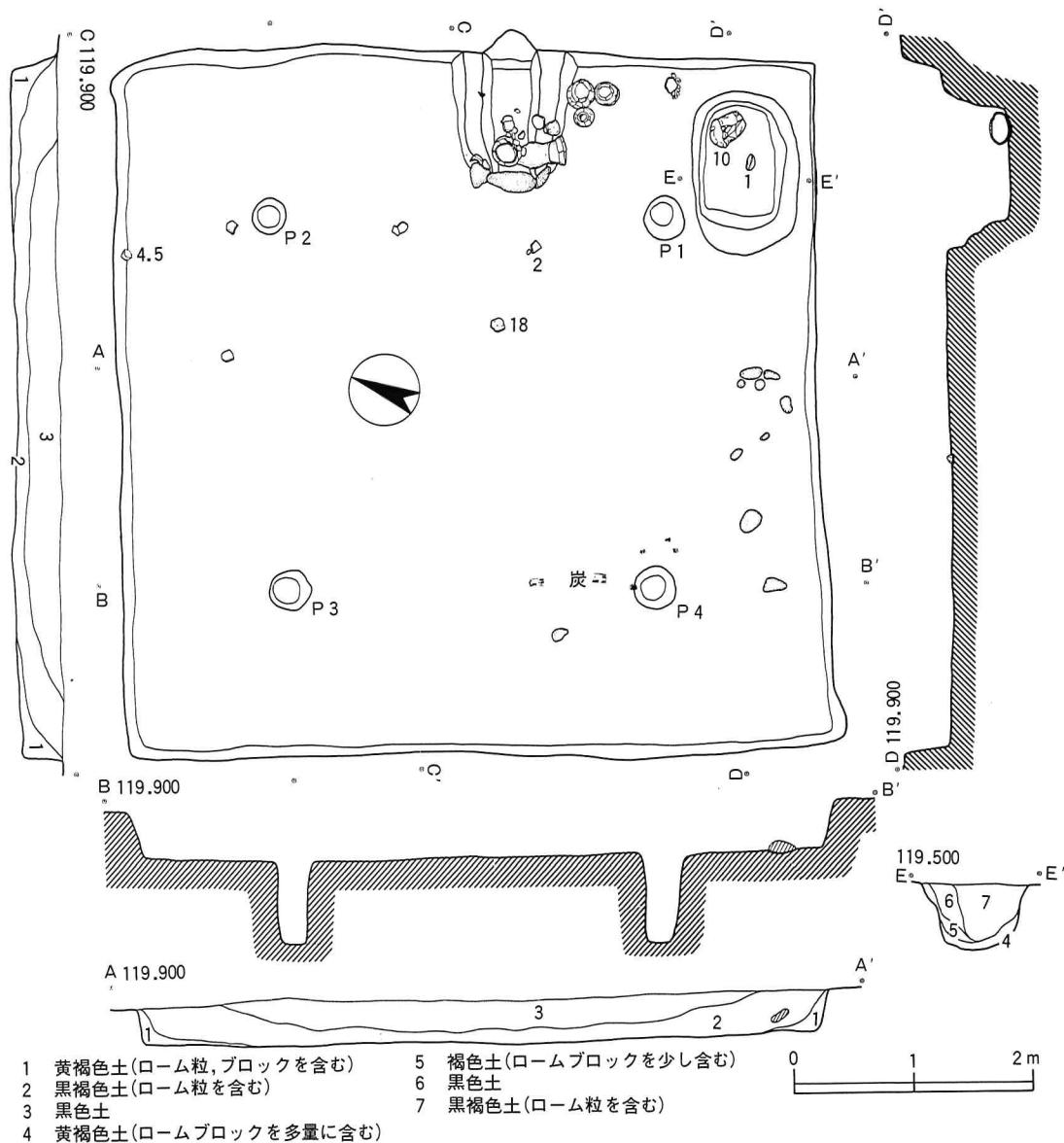
4	土師器 壺 (完形)	14.4 7.4 5.1	外面に稜を有す。口唇部は内傾する平坦面。	口縁部横ナデ。底面はヘラ磨き。口唇部ヘラで面取り。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。	小砂粒を多く含む胎土。暗褐褐色。	床面直上。
5	土師器 壺 ($\frac{1}{2}$)	(10.8) — 。	外面に鋭い稜を有す。 口縁部はやや内傾。口縁は貼り付け。	全面ヘラ磨き。	口縁部横位のヘラ磨き。	精製された胎土。 焼成良好。赤褐色。	貯蔵穴 1 の覆土中。
6	土師器 壺 (完形)	11.9 5.5 •	口縁部が僅かに外反し、 内面に軽い稜をつける。	口縁部～体部が横位、底面が放射状のヘラ磨き。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。	精製された胎土。 焼成良好。暗茶褐色。	覆土中（床面上30cm）の破片同士が結合。
7	土師器 壺 ($\frac{1}{2}$)	(12.5) (6.5) 。	口縁部内面に稜をつけ る。	口縁部横位のヘラ磨 き。他は不明。	全面横位のヘラ磨 き。	精製された胎土。 焼成良好。茶褐色。	覆土中（床面上40cm）の破片同士が結合。
8	土師器 壺 (完形)	9.6 10.3 •	口縁部が僅かに外反。 胴部は球形。	口縁部が横位、胴部～底面が放射状のヘラ磨き。	口縁部縦位、胴部上半横位のヘラ磨 き。他はヘラ削り。	精製された胎土。 焼成良好。赤褐色。	床面直上に倒立。
9	土師器 壺 ($\frac{3}{4}$)	12.5 9.0 •	口縁部が僅かに外反。	口縁部が横位、体部～底面が放射状のヘラ磨き。	口縁～体部上位を ヘラ磨き。他は不明。	精製された胎土。 焼成良好。茶褐色。	覆土中（床面上30cm）の破片同士が結合。
10	土師器 鉢 ($\frac{1}{2}$)	16.3 — —	口縁部は外湾。胴部は球形。	口縁部～胴部上半横位、胴下半が縦位のヘラ磨き。	口縁部縦位の粗い ヘラ磨き。胴部は斜位のヘラ削り。	精製された胎土。 焼成良好。茶褐色。 一部炭化物付着。	覆土中（床面上10cm）の破片同士が結合。
11	土師器 甕 ($\frac{3}{4}$)	16.8 (25.0) —	口縁部は外湾。胴部は球形で中程に最大径（ 23.0cm）を有す。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラな で。	口縁部横ナデ。肩部と胴下半ヘラ削 り。他はなで。	粗い砂粒を含む。 暗茶褐色。	床面直上。 胴部外面下半 に炭化物付着。
12	土師器 甕 ($\frac{1}{2}$)	17.2 — —	頸部が短かく直立。	口縁部横ナデ。胴部はヘラなで。	口縁部横ナデ。頸部縦位のヘラナデ。 胴部はヘラ削り。	砂粒を多く含む。 褐色。	覆土中（床面上30cm）の破片同士が結合。
13	土師器 甕 ($\frac{1}{2}$)	19.5 — —	口縁部は外湾。口縁部 外面に一条の沈線。	口縁部横ナデ。胴部はなで。	口縁部横ナデ。胴部はなで。	粗い砂粒を含む。 茶褐色。	覆土中（床面上30cm）
14	土師器 甕 ($\frac{1}{2}$)	16.5 — —	頸部が直立気味。	口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。頸部に縦位のヘラ磨 き。	砂粒を含む。 赤褐色。 二次焼成を受ける。	カマド掛け穴 の補強用。

4号住居跡

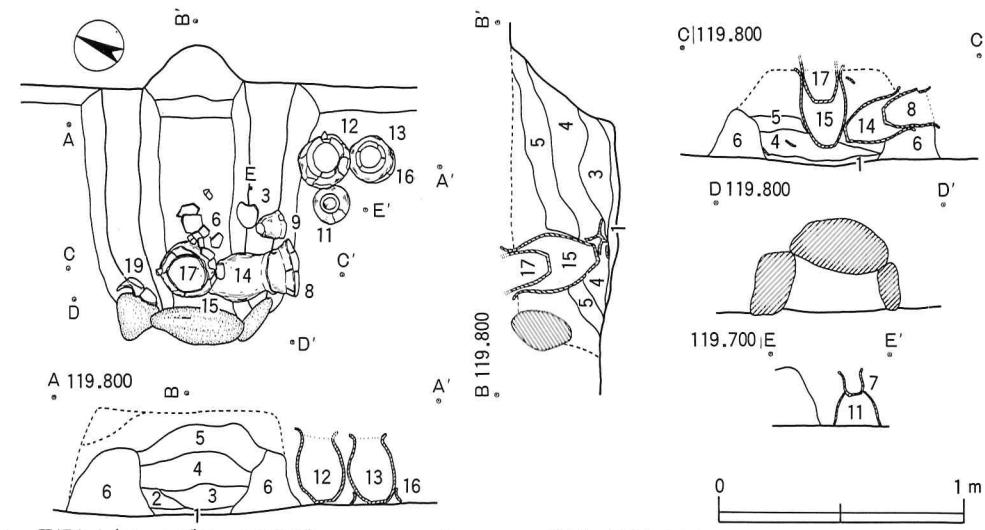
遺構 本住居跡は3号住居跡のすぐ西側に位置し、南西の台地縁辺部までは約40cmの距離がある。平面形は、一辺5.8mの正方形である。確認面からの深さは約40cmあり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面はロームで、全体によく踏み固められている。

4柱穴はほぼ対角線上に位置し、柱間は約3.1mである。各柱穴の深さは、次のとおりである。 P_1 —65cm。 P_2 —70cm。 P_3 —68cm。 P_4 —66cm。貯蔵穴は南東隅で、カマド右袖から約1mの距離にある。平面図は125cm×90cmの隅丸長方形を呈し、深さは55cmである。

カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。大きさは幅約90cm、奥行き約1.1mを測る。煙道部の壁への切り込みは僅かであり、確認された範囲では20cm程である。また、壁の立ち上がり基部もそのまま残している。袖はローム、黒土色、粘土を混合したものを材料に構築されているが、芯は土師器などで補強している。焚口前面には3個の川原石が「コ」の



第18図 4号住居跡実測図



第19図 4号住居跡カマド実測図

字状に高架されており、両袖をつなぐとともに補強の役割も果たしている。

住居跡内の覆土は3層に分かれ、レンズ状の堆積を示している。なお、P₂の周辺では、床面近くに焼土や炭化物が多く認められている。

遺物 本住居跡よりは、多数の土師器が出土した。しかも、床面直上かそれに準ずる位置での検出がほとんどであり、完形品も多い。特に集中して検出された位置は、カマド内とその周辺および貯蔵穴内である。これらの大部分は、当時使用されていた状況をそのまま示しているものと思われる。

カマドでは、15の甕が17の甕を差し込んだまま掛け穴に掛かり、さらに6の高壺が支脚としてこれらを支えている状態が検出されている。また、右袖前端部には14の甕が8の鉢を差し込んだ状態で横たわっている。当時は、天井部に立てられていたものと思われる。

カマド右袖のすぐわきには、4個の土器が検出されている。この中で13の甕は16の口縁部を、7の小形甕は11の甕をそれぞれ台に利用している。16は胴部以下を、11は口線部をそれぞれ欠損した廃物であり、これらをうまく再利用している状況は、非常に興味深い。

貯蔵穴内よりは、10の甕と1の壺が底面に付いた状態で検出されている。

土器以外の出土遺物としては、川原石が目立つ。10cm前後のものから20cmぐらいのものと大小様々な川原石が、十数個検出されている。特に集中して検出された地点は南壁の近辺であり、床面に密着しているものが多い。

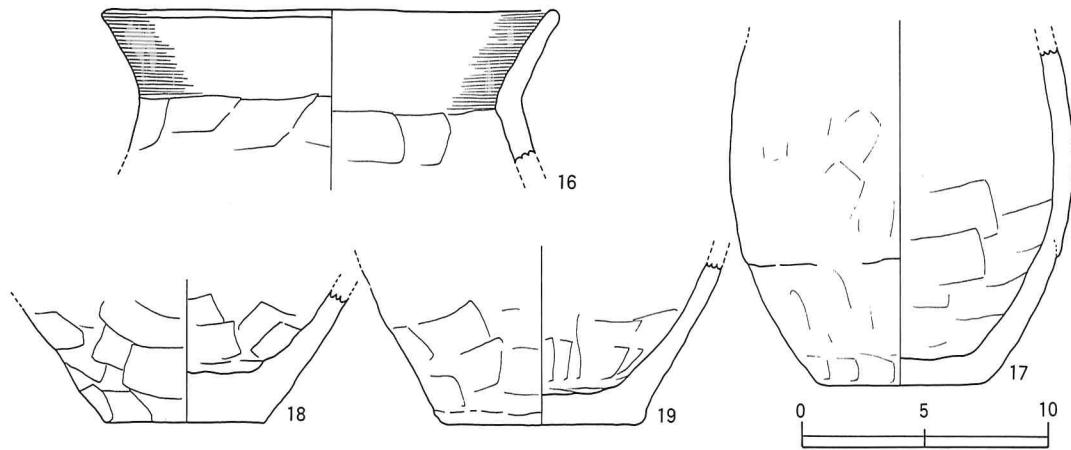
図示し得た土器は19個体であるが、なかでも甕の量が8個と非常に多く、本住居跡の一つの特徴となっている。



第20図 4号住居跡出土土器実測図(1)



第21図 4号住居跡出土土器実測図(2)



第22図 4号住居跡出土土器実測図(3)

4号住居跡出土土器説明表

番号	器種 (残存量)	法量	器形の特徴	整形の特徴		器質	出土位置その他
				内面	外面		
1	土師器 坏 (3/4)	12.6 5.5 •	外面に稜を有す。口縁部は直立。口縁は貼り付け。	口縁部～体部横位のヘラ磨き。	口縁部横位のヘラ磨き。他はヘラ削り。	胎土。色調は1と同じ。焼成やや不良。	貯蔵穴内床面直上。
2	土師器 坏 (2/3)	12.1 5.3 •	外面に稜を有す。口縁部は直立。口縁は貼り付け。	口縁部～体部横位のヘラ磨き。	口縁部～体部横位のヘラ磨き。他はヘラ削り。	小砂粒を多く含む胎土。焼成良好。	床面直上。
3	土師器 坏 (1/3)	(15.0) (6.8) •	外面に稜を有す。口縁部は外傾。	全面横位のヘラ磨き。	口縁部横ナデ。他はヘラ削り。	微砂粒を多く含む胎土。茶褐色。	カマド右袖の補強用。
4	土師器 坏 (完形)	6.4 3.3 3.9	器面の凹凸が著しい。	手づくね。	手づくね。	微砂粒を含む胎土。茶褐色。	床面直上。
5	土師器 坏 (1/4)	(6.0) 3.3 (4.0)	器面の凹凸が著しい。	手づくね。	手づくね。	微砂粒を含む胎土。茶褐色。	床面直上。
6	土師器 高坏 (2/3)	(残存高) 13.1	坏部の口縁部と脚部の裾部が欠損。	坏部放射状ヘラ磨き。脚部横ナデ。	脚部横ナデ。他は指先なで。	小砂粒を含む胎土。赤褐色。	カマドの支脚。倒立して使用。
7	土師器 甕 (完形)	10.5 8.2 4.9	口縁部が外反。	口縁部横位のヘラ磨き。他はヘラなどで。	口縁部横ナデ。他は手づくね。	精製された胎土。明褐色。	床面直上。11の上に載る。
8	土師器 鉢 (完形)	20.4 13.7 7.0	口縁部が僅かに外反。全体に器肉が厚手。	口縁部横ナデ。他はヘラ磨きで大部分が縦位。	口縁部横ナデ。胴部上部が横下部が縦位のヘラ削り。	微砂粒を多く含む胎土。外面褐色、内面黒色処理。	カマド右袖上に渡した14に差し込まれる。

9	土師器 甕 (完形)	14.2 15.5 4.8	口縁部は短かく外反。 肩部に最大径(15.5)。 器面の凹凸が著しい。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラなどで。	口縁部横ナデ。胴部は指先などで。	微砂粒を含む胎土。 焼成やや不良。明褐色。	カマド右袖の補強用。
10	土師器 甕 (完形)	21.6 26.5 8.7	口縁部は「く」の字に外反。胴部最大径(20.6)はやや上位。	口縁部横ナデ。胴部は上部が横位、下部が斜位のヘラ磨き。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラ削りの後斜位の粗いヘラ磨き。	砂粒を多量に含む胎土。淡褐色。	貯蔵穴床面直上。
11	土師器 甕 (½)	残存高 15.3 8.3	胴上半部欠損。大形單孔。	全面縦位のヘラ磨き。孔部端は面取り状のヘラ削り。	最下部は手づくね。他は縦位のヘラ削り。	砂粒を多く含む。焼成不良。外面暗褐色、内面黒褐色。	床面直上。倒立させて7の台に利用。
12	土師器 甕 (完形)	15.7 31.4 7.8	口縁部は軽く外反。胴部最大径(21.9)は、ほぼ中央。底部やや突出気味。中央部がくぼむ。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラなどで。	口縁部横ナデ。胴部は最下部が横位の上部から中程が縦位の指先などで。	砂粒を多く含む胎土。焼成やや不良。暗赤褐色。	床面直上。
13	土師器 甕 (完形)	14.6 27.3 6.7	口縁部は軽く外反。胴部最大径(20.6)はやや下位。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラなどで。	口縁部横ナデ。胴部は上半がなで、下半がヘラ削り。	砂粒を多く含む胎土。焼成良好。外面黒褐色、内面赤褐色。	床面直上。16を台にして。胴部外面炭化物付着。
14	土師器 甕 (完形)	18.2 31.0 7.1	口縁部外反。長胴で最大径(20.5)は中程。全体に器肉が厚手。	口縁部横ナデ。胴部上半斜位のヘラなで。	口縁部横ナデ。胴部は全面縦位のヘラ削りの後上半に粗いヘラ磨き。	砂粒を多く含む胎土。褐色。	カマド右袖に渡した状態。胴部外面炭化物付着。
15	土師器 甕 (完形)	20.0 34.5 6.9	口縁部は大きく外反し端部が直立。長胴で最大径(22.5)はほぼ中程。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラなどで。	口縁部横ナデ。胴部最下部ヘラ削り。他は指先などで。	砂粒を多く含む。褐色。胴部外面下半部に炭化物付着。	カマドの掛け穴に掛けた状態。
16	土師器 甕 (½)	17.7 — —	口縁部「く」の字状に外反。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラなどで。	口縁部横ナデ。胴部は横位のヘラ削り。	砂粒を多く含む胎土。焼成不良。褐色。	床面直上。倒立させ13の台に利用。
17	土師器 甕 (¼)	残存高 (13.5) 6.4	口縁部欠損。胴部最大径(14.0)は中程。	横位のヘラなで。	なで。	小砂粒を含む胎土。焼成不良。淡褐色。	カマド掛け穴に掛かった15に差し込まれ。
18	土師器 甕 (½)	— — 6.2	底部のみ。	横位のヘラなで。	横位のヘラ削り。	砂粒を多く含む胎土。暗褐色。	床面直上。
19	土師器 甕 (½)	— — 7.9	底部のみ。	横位のヘラなで。	横位のヘラ削り。	砂粒を多く含む胎土。焼成不良。赤褐色。	カマド左袖の先端部に付着。

3. 古 墳

古墳群の立地 本遺跡内には 5 基の円墳が確認されている。1 基は径 30m 近い将軍塚古墳であり、遺跡南東部の台地中央部に 1 基独立した状態で立地している。他の 4 基は、将軍塚古墳から 600m 程北西の地点に、集中して立地している。発掘調査に先だっての分布調査の際、この 4 基を群として捕え南より 1 ~ 4 号墳と名付けた。

本遺跡をのせる台地は、北西から南東に向かって狭長に延びるものであり、北東側に姿川、南西側に武子川がそれぞれ流れている。台地両側にはそれぞれの河川によって開析された水田底地面が広がるが、台地上部との比高は 15・6m を測る。

古墳群の立地するのは、この台地の南西側縁辺部にあたり、南方約 150m に武子川を望む地点である。この地点は丁度台地縁辺部がいったん西方へくびれ込む部分であり、斜面はほぼ南向きとなっている。1, 3, 4 号墳は、この南斜面を登りきった位置に、また 2 号墳はこれらよりやや奥まった平たん部に、それぞれ立地している。

1 号墳

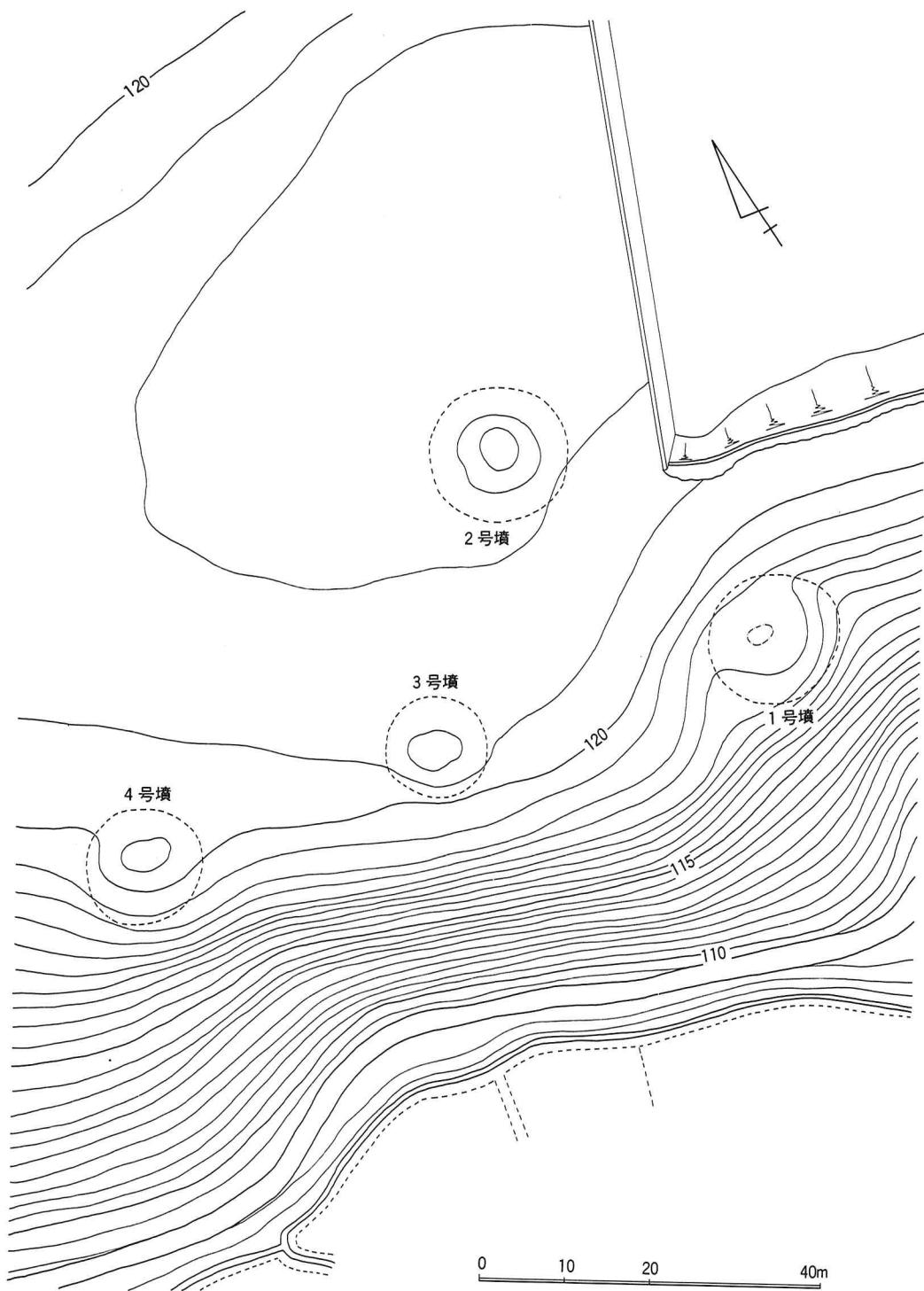
本墳は傾斜 15 度ほどの南緩斜面に立地している。このため発掘調査前における墳丘測量調査では、山脣にこぶ状のせり出し部があるというような状態であった。この時点における見かけの墳丘は、径 12m 高さ 1.2m 程の、かなり小規模なものであった。

墳丘 墳丘径は第 2 トレンチと第 6 トレンチにおいて検出された墳端部間の距離からすると 12.5m であるが、第 4 トレンチにおいて検出された墳端部から石室前庭部と思われるあたりまででは 14m 前後を測る。やや南北に長い円墳であったようである。

本墳の場合斜面上に築くということから、石室構築部を中心にかなり大きく地山を削平し、平たん面を造り出している。削平は大きく 2 段階に分かれ、最初現墳丘面の半分程の面積に渡って行なわれ、次に石室掘り方部を 1 段低く削り込んでいる。この削平は、特に山寄り部においてはローム層までおよんできている。

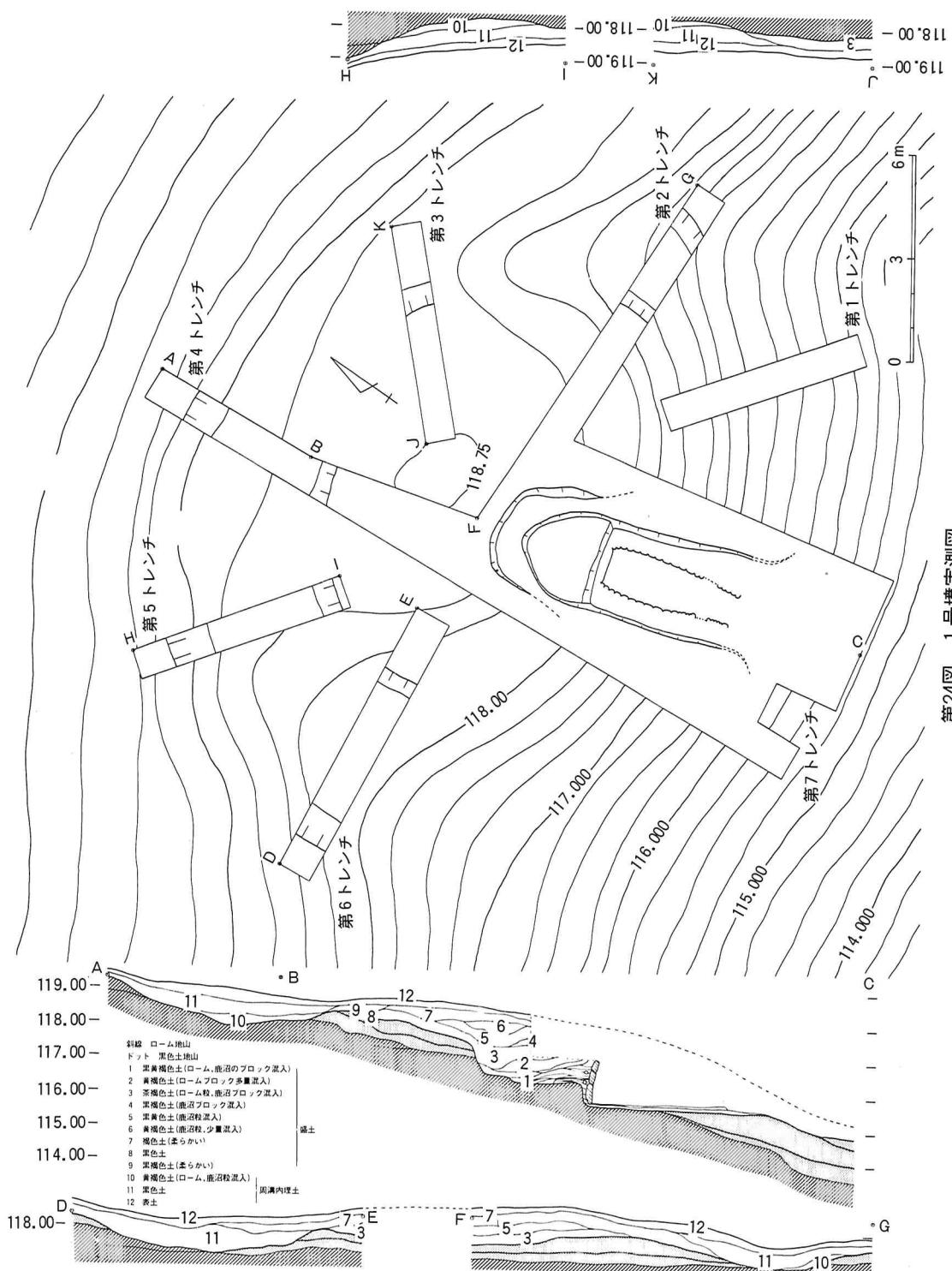
盛土は、石室構築後ほぼ奥壁を中心として行なわれている。周溝や石室掘り方から出されたローム土や鹿沼土をふんだんに混ぜて 1 層 1 層固くたたきしめられている。墳丘中心部あたりでは、6 ~ 7 層の盛土が確認されており、表土までの高さは約 2m となる。

周溝 トレンチによって確認調査を行ったが、第 1 ・ 第 7 トレンチ、すなわち石室が開口する墳丘南側部分では、周溝が確認されておらず、北側の山寄り部だけに確認できる。周溝の幅は各トレンチによって若干異なるが 4m 前後である。ただし第 2 トレンチにおい



第23図 古墳群全体実測図

第24図 1号墳実測図



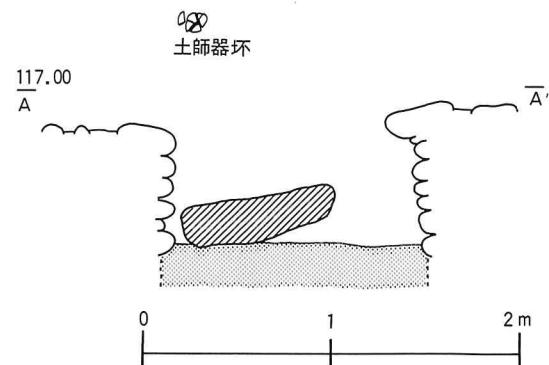
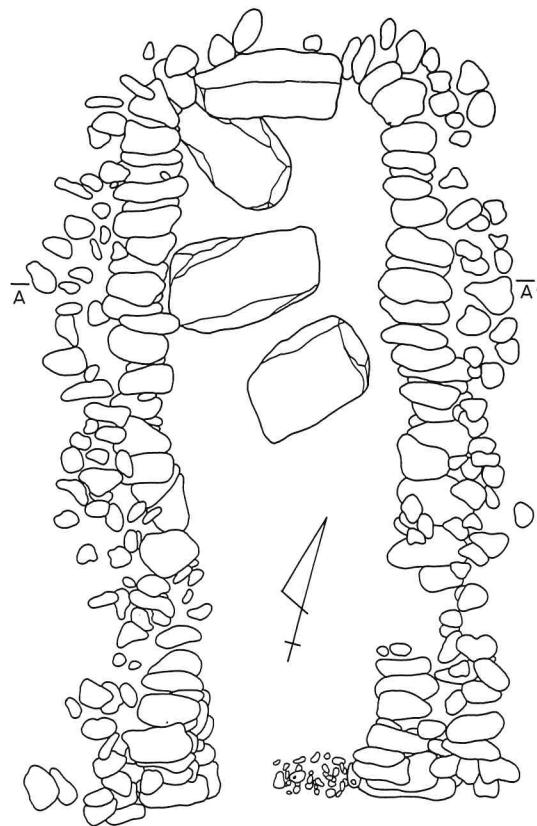
てはやや狭くなり、2.5m程になってい。南側になるとともに収束して行くものと思われる。一方、周溝の深さは差が大きく、各トレンチにおける現表土からの深さは次のとおりである。第2トレンチー60cm。第3トレンチー90cm。第4トレンチー105cm。第5トレンチー95cm。第6トレンチー110cm。以上のように、墳丘北側が深く掘られている。

斜面上への築造ということから、墳丘盛土に直接関係してくる周溝の掘削も、技術的に容易な北側山寄り部分に集中したものと考えられる。

石室 主体部は主軸方位がN-12°-Eで南に開口する袖無型横穴式石室である。天井部および側壁南部から羨門部に至る部分がかなり倒壊している。後世に盜掘を受けたようである。

天井石は盜掘の際かなり抜き取られてしまったようであるが、石室内の埋土中に崩れ落ちたと思われる3個の天井石が検出されている。大きさは3個ともほぼ同じであり、長さ85cm前後、幅40~50cm、厚さ25cm前後である。流紋岩の割り石である。

奥壁は3枚の凝灰岩を横積みにしている。大きさは下段が幅105cm、高さ60cm、厚さ25cm、中段が幅95cm、高さ35cm、厚さ20cm、上段が幅80cm、高さ33cm、厚さ21cmである。3枚の石は、石室内方向へ10°程傾斜して積み上げ



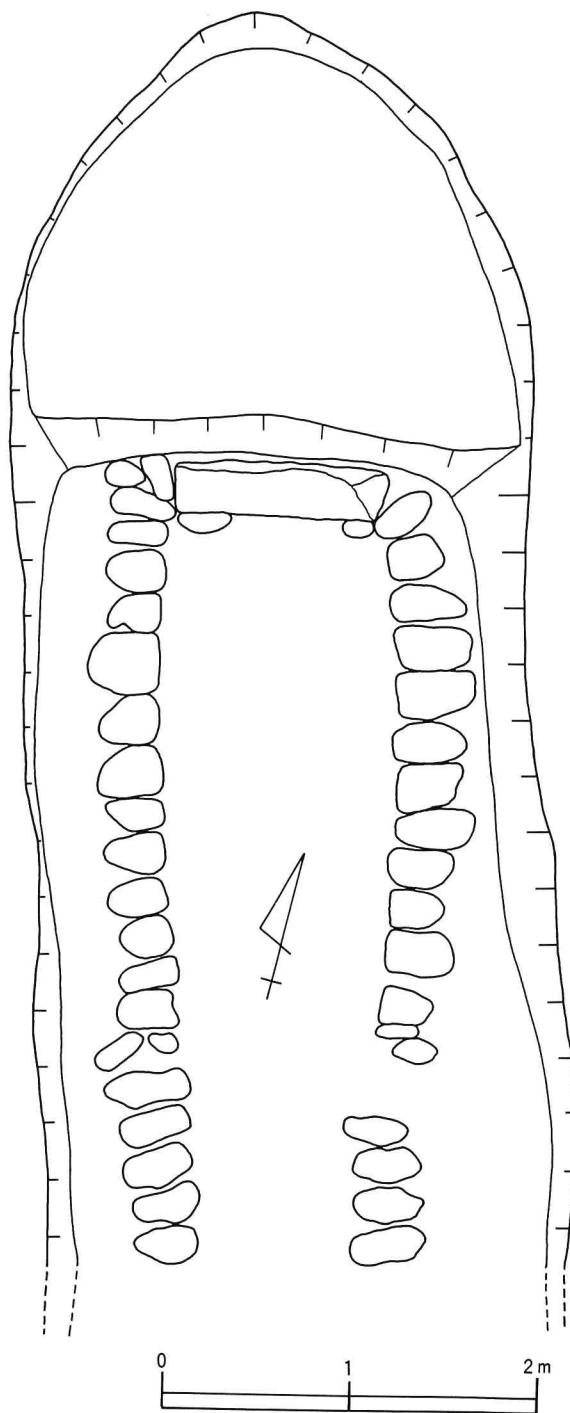
第25図 1号墳石室実測図(1)

られている。各石の内側は、工具によって表面が平滑に仕上げられているが、他の面には工具痕が認められない。内面だけを意識的に整形したものと思われる。

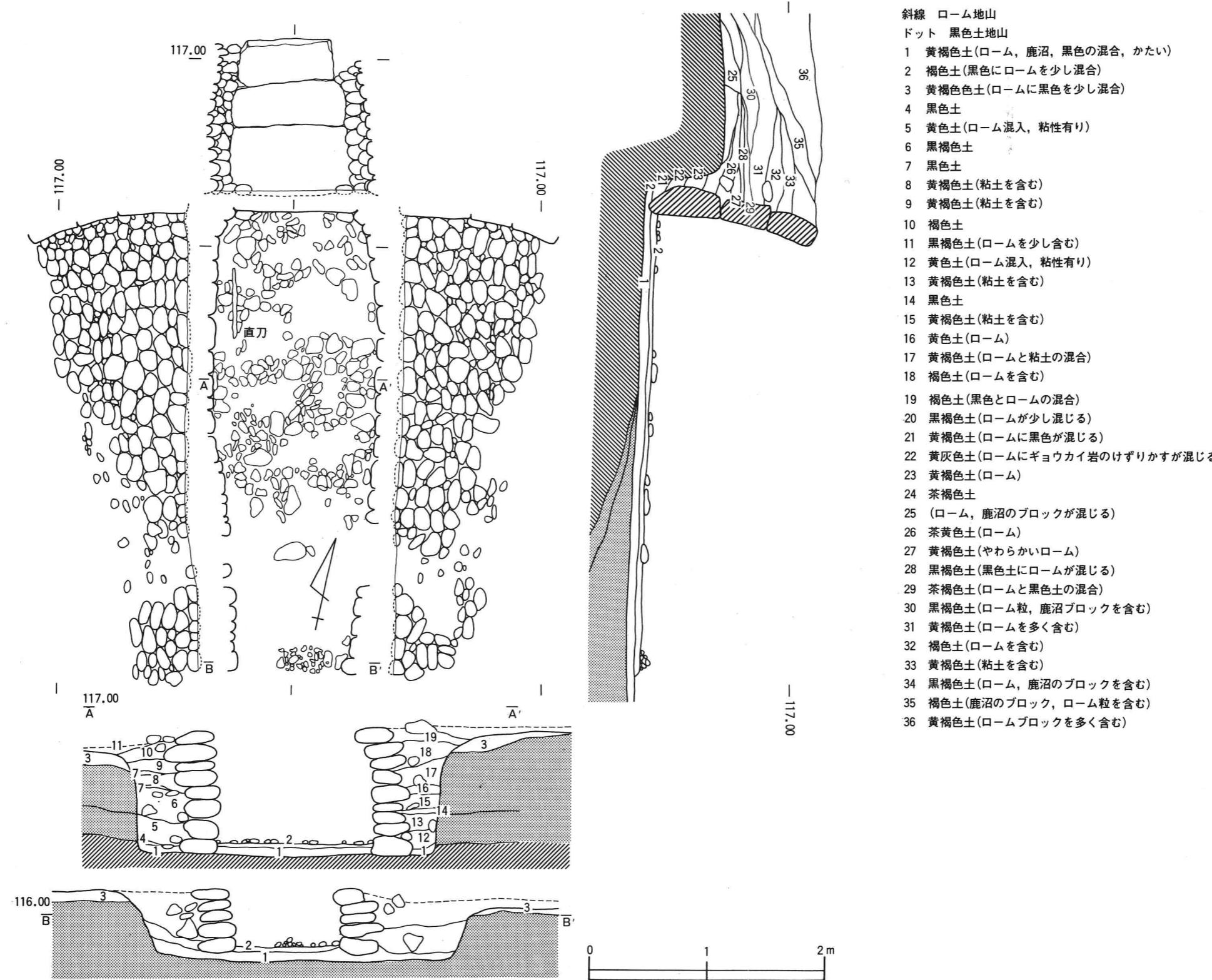
側壁は川原石を小口積みにしている。川原石は、厚さが15cm程度で長さ30cm前後の横長のものを使用し、間げきにこぶし大の石を詰め込んでいる。盜掘のために、側壁上部は倒壊しているが、奥壁上段の石幅あるいは天井石の幅などから推定すると、20~30cmぐらいの持ち送りがあったものと思われる。また奥壁への移行部はゆるやかにカーブを持たせており、それは根石の並べ方にもよく示されている。

床面は大小さまざまの平石を敷きつめているが、奥壁から約2.8mの地点でこの敷石が認められなくなる。丁度この地点では側壁も抜き取られたような状態になっており、おそらくここで玄室と羨道が仕切られていたものと思われる。また羨門部床面には、小礫が土手状に積み上げられている。

各部位の計測値は、次のとおりである。石室全長3.9m。玄室長2.8m。羨道長1.1m。玄室幅は奥壁部で1m、中央部で1.35m、玄門手前で1.15mであり、胴張り型



第26図 1号墳石室実測図(2)
(掘り方と根石の並び)



第27図 1号填石室実測図(3)

の平面形となる。羨門部幅0.85cm。奥壁高1.3m。

掘り方 斜面地山を整形し、東西幅2.7m、南北長約5m。深さ0.8m前後の掘り方をつくっている。さらに掘り方底面と肩部上面には、7~8cmの厚さでロームを敷きつめている。奥壁下段の石および側壁の根石は、このローム敷き層にくい込むような形で並べられている。なお、石室内にはこの上にもう一層ローム混りの層が敷かれている。

裏込めには、こぶし大の川原石、ローム、粘土、黒色土などが使用されている。裏込めは、側壁の石を1段か2段積むごとに、しっかりとたたきしめるように行われている。

奥壁のすぐ北側には、掘り方に続く形で半円形の平たん部が認められる。広さは約3.5m²で、高さは奥壁下段の石と同じ高さである。この付近で側壁に使用されるような大きめな川原石が何個か検出されたことにより、石材置き場として使用されたものと推定している。

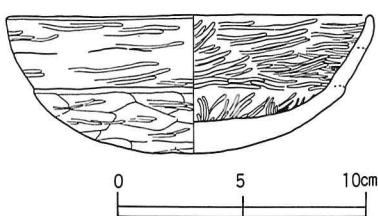
出土遺物

直刀 石室内床面敷石上より検出される。位置は西側壁から15cmの地点であり、切っ先は南向きである。

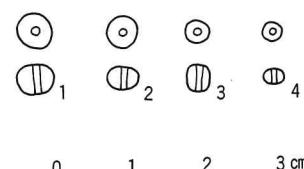
切っ先は端部を欠損するが、やや脹をもつものようである。両区とも短かく切り込まれる型で、茎は先へ狭くなる。各部位の計測値は次のとおりである。現存刀身長59.2cm。

刀身幅は元で2.9cm。棟は元で0.7cm。峰で0.5cm。棟区0.2cm。刃区0.2cm。茎長8.8cm。茎幅は元で2.4cm。先端で1.5cm。目釘は茎の先端近くに1個つき、長さは2.5cm。径0.5cm。さらに片方の端部が0.5cm程屈曲する。

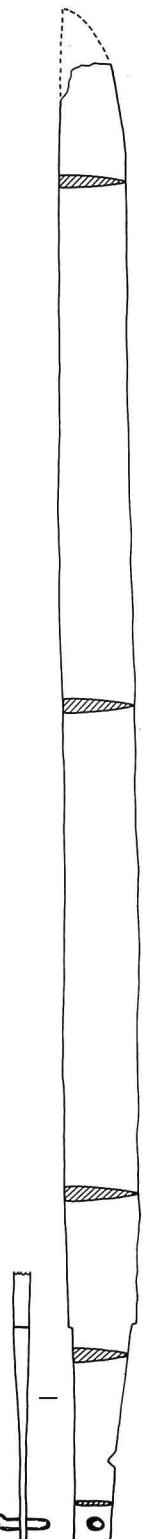
ガラス小玉 石室床面の土をふるった際に4個が検出される。各ガラス小玉の色調は、次のとおりである。1—緑色。2—黄色。3—青色。4—淡青色。



第28図 1号墳出土土師器実測図



第29図 1号墳出土ガラス小玉実測図



第30図 1号墳出土直刀実測図

土師器 出土位置は羨門の南1.2mの地点で、レベルは石室掘り方底面のローム敷き層の上面である。前庭部のプランは明確でなかったが、おそらくこの範囲内と思われる。

口径14.5cm、器高5.5cmを測る丸底の壺である。体部外面に稜を有し、内面にも軽い段をつくっている。口縁部は内弯気味に開いている。成形は紐積みであり、底部がかなり厚手になっている。内面は全面ヘラ磨きされ、外面は口縁部横など底部ヘラ削りの後粗いヘラ磨きを施している。内外面ともに黒色処理された、たいへん焼成の良い土器である。

2号墳

本墳は1号墳の北約25mの台地上平たん部に立地する円墳である。発掘調査前における墳丘測量調査では、直径15m、高さ1.3mほどの小円墳であったが、発掘調査の結果では、周溝を含めた直径が約24mであることが判明した。

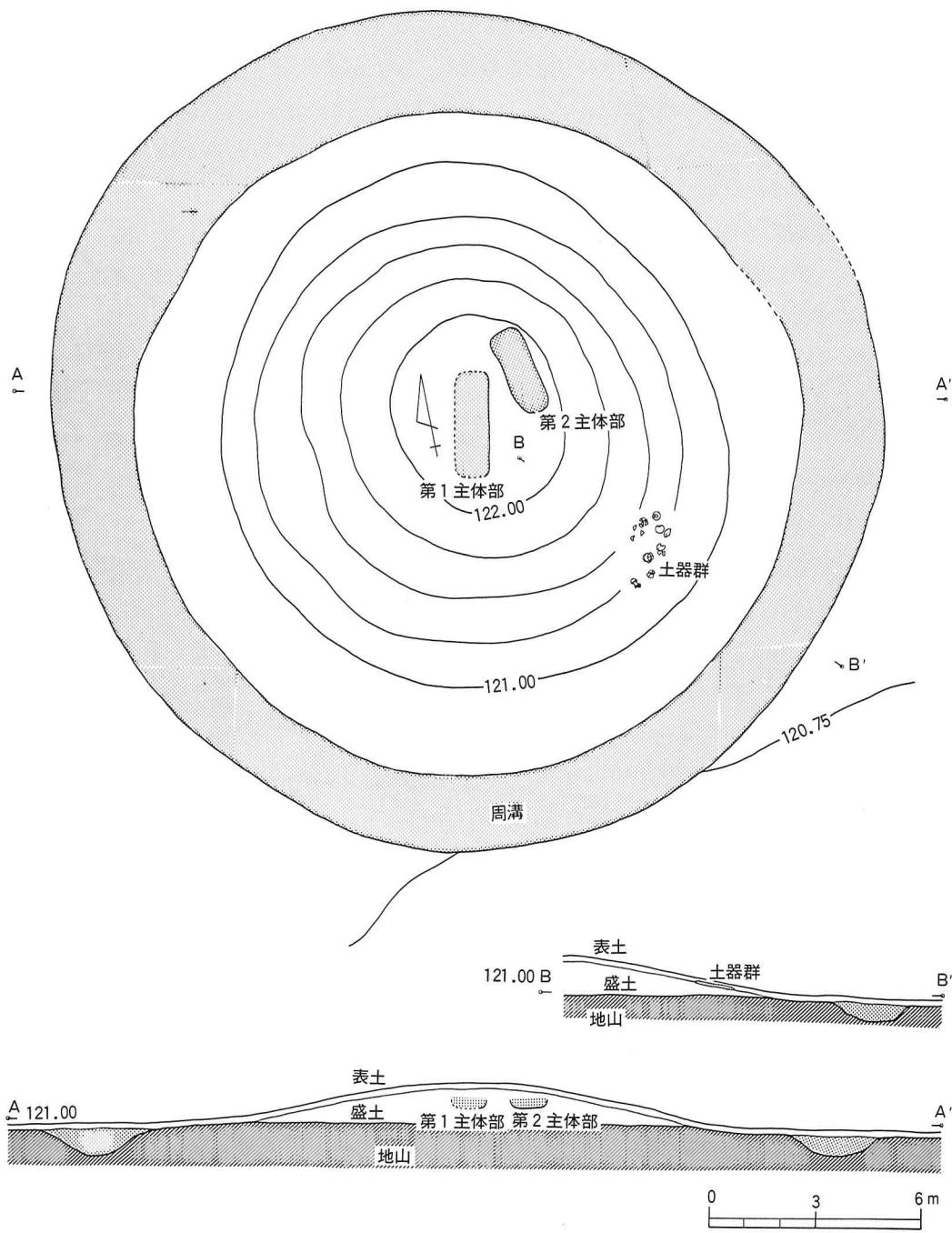
墳丘 規模は、周溝内側の立ち上がり部を基準にすると直径18.9m前後、中心部での高さ1.35mを測る。ただし、周溝内側の立ち上がり部から内方へ約2mの幅で平たん部が認められ、この部分には盛土がなされていない。したがって、実際に盛土された範囲の直径は、ほぼ15mである。

盛土の一つの技術として、最初に外縁部を土手状に積み上げたらしいことが、南北の断面図によく表われている。墳丘築造過程での盛土の流出を防ぐための配慮と思われる。

周溝 周溝の幅は、墳丘北側でやや広く3m前後、逆に南側では狭くなり2m余りとなる。底面のレベルはほぼ一定であり、現表土からの深さは90cm前後である。周溝底面の形は、鍋底状を呈し平たん面は形成しない。

墳丘北東側の周溝内には、長さ6.1m、幅2.3m、現表土からの深さ2.2mの土坑がある。平面形は、丁度周溝のカーブに合った長方形である。覆土はレンズ状の堆積を示しており、周溝とともに埋没したようである。また底面をみると、ローム層を掘り抜き、鹿沼軽石層に達したところで意識的に止めている様子が窺える。以上のような点から、墳丘盛土に使用するローム土を採掘した土坑であったことが推定される。

墳丘北側から北西側の周溝内には、4基の土坑と多数の柱穴状ピットが検出されている。土坑1と土坑2はほとんど接しているが、土坑3、土坑4は一定の間隔(約5m)をおいて周溝内に並んでいるように思える。しかも、4基とも周溝外側の立ち上がり部に位置しているのは、何か意味のあることを感じさせる。また、平面形は4基とも隅丸長方形ということで一致している。各土坑の計測値は、次のとおりである。土坑1は、長さ1.8m、幅0.5m、確認面からの深さ0.2m。土坑2は、長さ1.8m、幅0.45m、確認面からの深さ



第31図 2号墳実測図(1)

0.5m, 土坑3は、長さ1.7m, 幅0.6m, 確認面からの深さ0.6mで、周溝内方へやや傾斜させた掘り方である。土坑4は、長さ1.7m, 幅0.7m, 確認面からの深さ0.45m。なお、各土坑とも出土遺物は全く検出されていない。

柱穴状ピットは、土坑3, 土坑4の周辺に集中して検出されている。深さはまちまちであるが、60~70cmのかなり深めなものも認められる。また2個1組で、片方に補助的な役割をさせたのではないかと思われるものも、何組か認められる。おそらく、相当数は柱穴として使用されたものと考えられる。並び方に規則性はないようであるが、中にはP₅~P₆のように、周溝に渡したような形で一列に並ぶものもみられる。

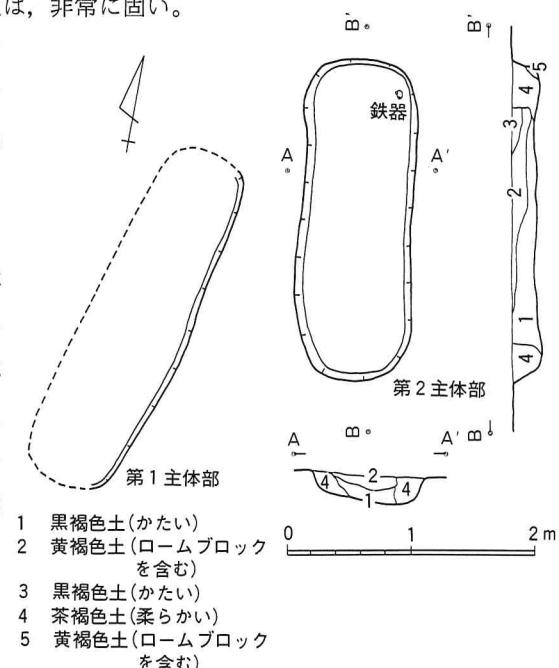
墳丘下整地面 盛土と旧表土整地面(黒色土)の間には、全面に厚さ数センチの薄い層がみられる。色は非常に鮮やかな黒色を呈し、炭火物が多量に混入している。この層の範囲は、盛土がされている部分全体にわたっている。

また、この面から4個の柱穴状ピットが検出されている。4個ともかなり傾斜をもたせた掘り方であるが、それらの方向は一定していない。確認面からの深さは、最も深いものの場合1m近くもある。位置的にみれば、4個とも盛土下の炭火物を含む層の範囲内という特徴がある。

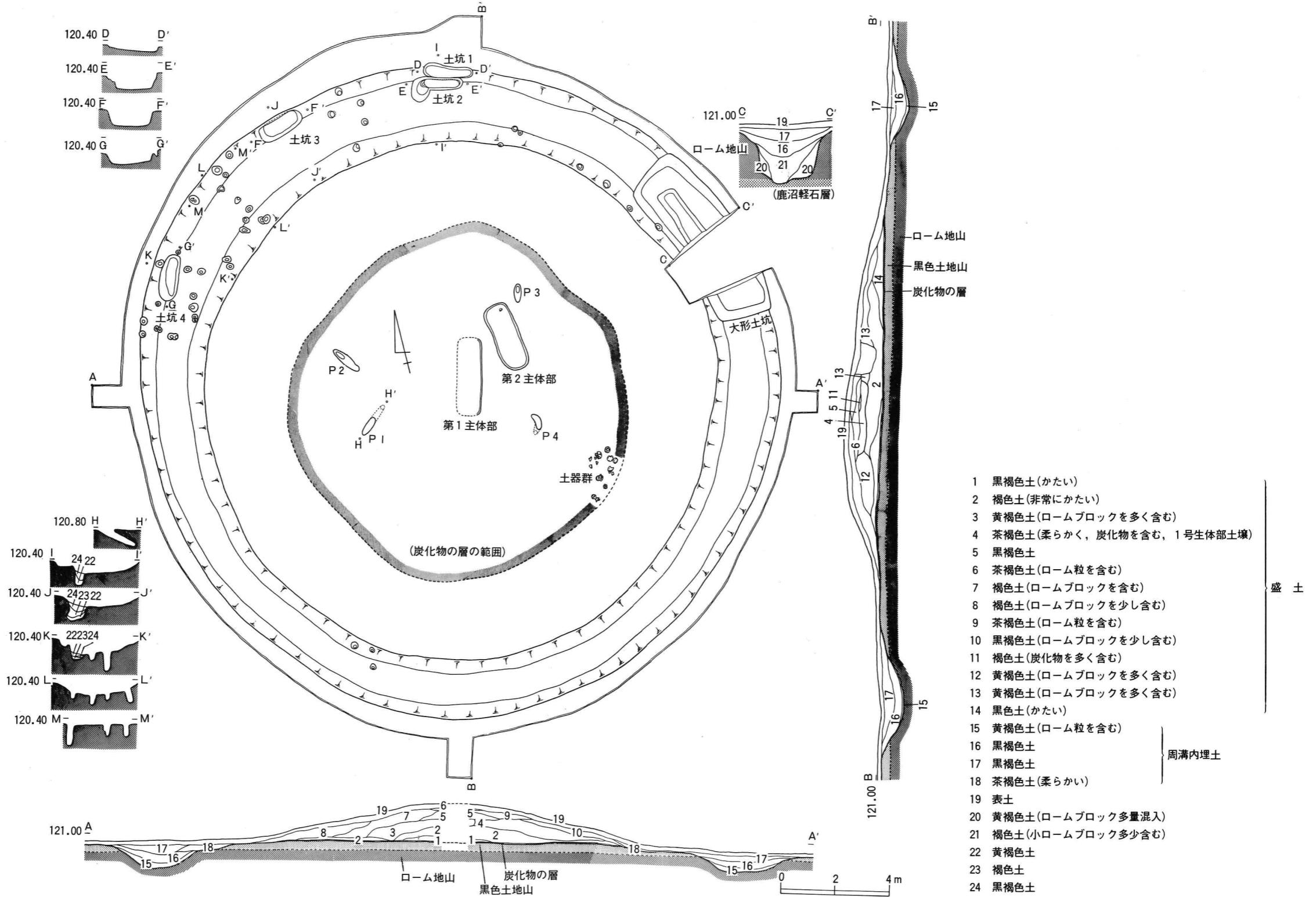
主体部 埋葬主体部は、2基の隅丸長方形を呈する土壙である。

第2主体部は、長さ2.56m, 幅0.9m, 確認面からの深さ0.25mの大きさで、主軸方位をN-10°-Wにとる。墳丘が3層(高さにして0.9m)ほど盛土された段階で掘られたものと思われる。因に旧表土面から土壙底面までの高さは0.6mである。土壙内の覆土は、大きく周縁部と中央部に分かれる。周縁部の土は、茶褐色を呈する非常に柔らかい腐食したような土である。これに対し中央部の土は、非常に固い。

第1主体部は、発掘調査の手順がまずく、立ち割りトレンチによって破壊してしまい、僅かに東側の一部が残ったものである。大きさは推定で、長さ2.9m, 幅0.9m, 深さ0.28mで、主軸方向をN-12°-Eにとる。確認面は、第2主体部とほぼ同じレベルである。残存していた土壙内の覆土は、第2主体部の周縁部のものと同じである。また覆土の上層には炭火物の混入がみられ、中央部よりやや南よりのところには、焼土が数cmの層をなして確認されている。



第32図 2号墳主体部土壙実測図



第33図 2号墳実測図(2)

出土遺物

鉄器 第2主体部土壙の北東コーナー近くより出土したものである。出土位置は、周縁部の柔らかい土層中であり、底面より約10cm浮いた状態で検出されている。所謂、スキ・クワ先状鉄整品と思われる。

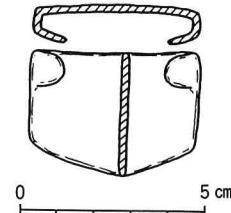
大きさは、幅4.6cm、長さ3.2cmで、厚さは2~3mmである。上端部両側に幅0.9cm、長さ1cmの先端が丸い爪状の突起があり、これが、内側へ曲り込んでいる。

土器 墳丘南東側で、中心部から約5mの地点で出土したものである。出土位置は、墳丘盛土の裾部にあたり、周溝との間に平たん部の直前である。現表土層を除去した段階で検出されたものであり、層位的には墳丘盛土の直上である。

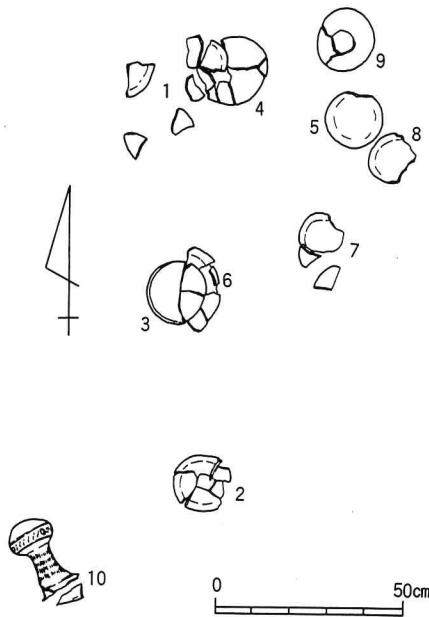
土器の検出された範囲は、南北3.5m東西2mほどの広さであり、この部分内より土師器坏9個体、須恵器龜1個体の計10個体が出土している。土師器坏は、まとまって出土しており、2個体重ねになっているものもある。これに対し、須恵器龜はやや南にはずれた位置にある。なお、9個体ある土師器坏のうち6と9の2個体は、焼成後の底部穿孔がなされている。

土師器坏 1~6は半球形状を呈するものであり、口径は14cm前後から15cm、器高は5.5cm前後である。総て同じつくりであり、内面に丁寧な放射状のヘラ磨きが施こされ、外面は口縁部が横なで、底部がヘラ削りである。色調は褐色または暗褐色を呈し、黒斑をもつものもみられる。7~8は体部に張り出す稜を有し、口縁部が内傾または直立するものである。内外面の調整は、1~6と同じであり、内面はやはり丁寧な放射状のヘラ磨きが施こされている。色調は暗褐色を基調としている。なお、9は内面黒色処理がなされている。

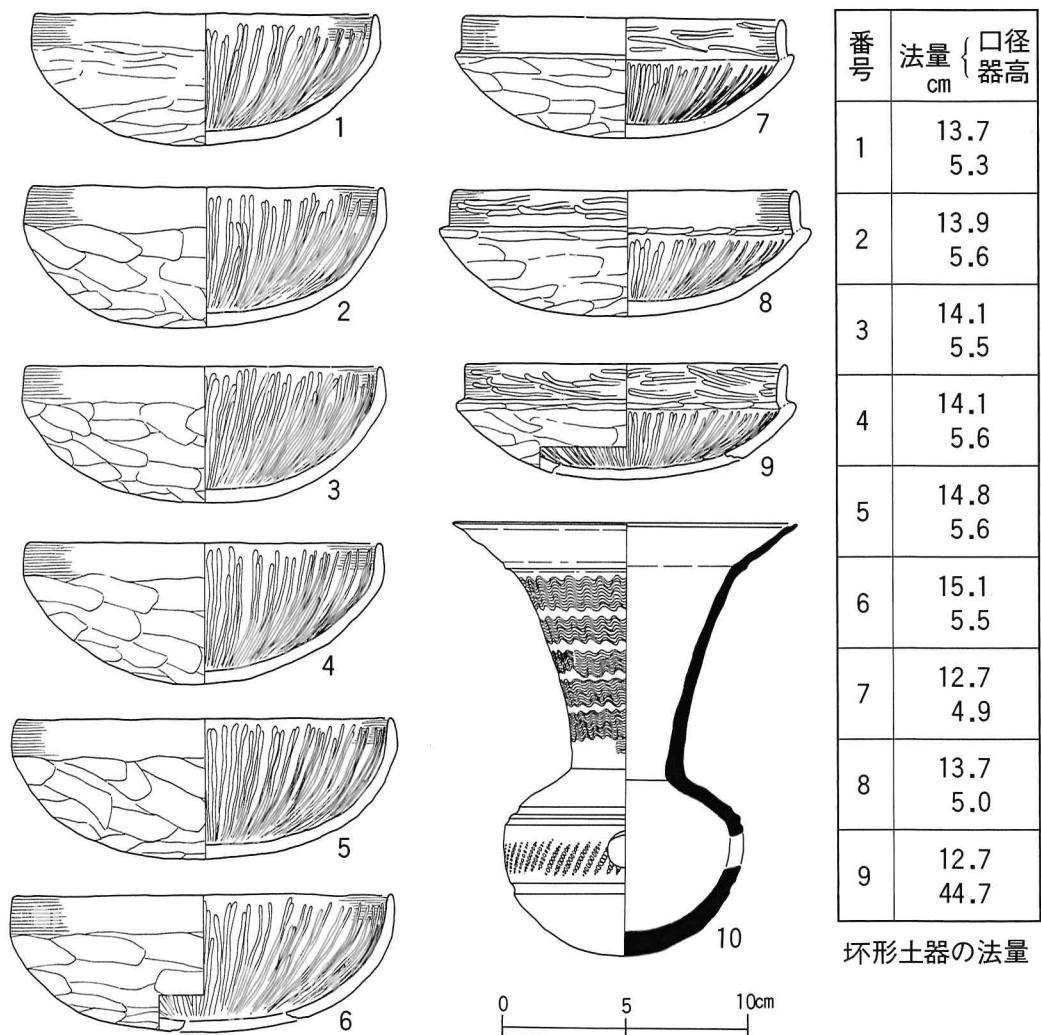
須恵器龜 大きさは、口径13.9cm、器高17.4cm、胴部最大径9.7cmである。頸部には、12本1組の波状文が、5段にわたって施こされている。胴部文様帶は、上下が波線で区画され、間に櫛状工具による刺突文が配されている。底部外面は指頭によるなで調整がなされている。胎土には2mm前後の白色砂粒が多く含まれる。焼成は良好で、青灰色を呈する。



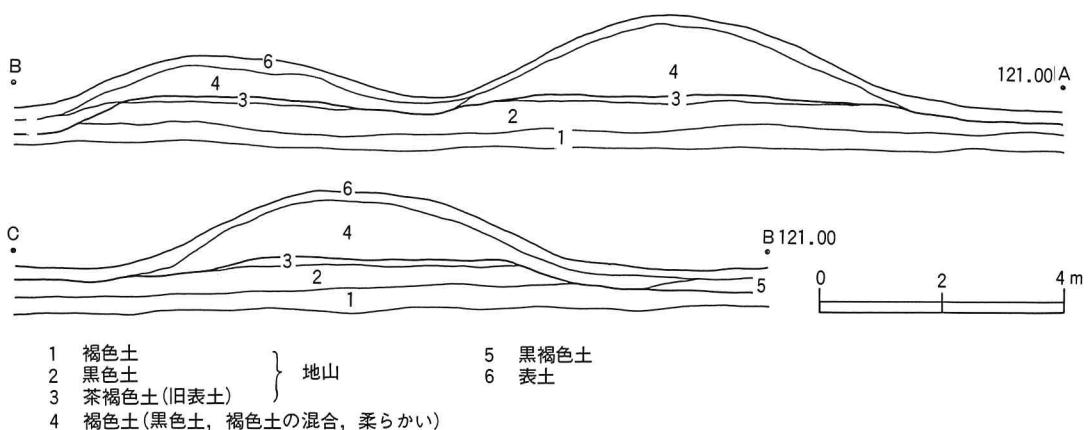
第34図 2号墳出土
鉄器実測図



第35図 2号墳土器群出土状況実測図



第36図 2号墳出土土器実測図



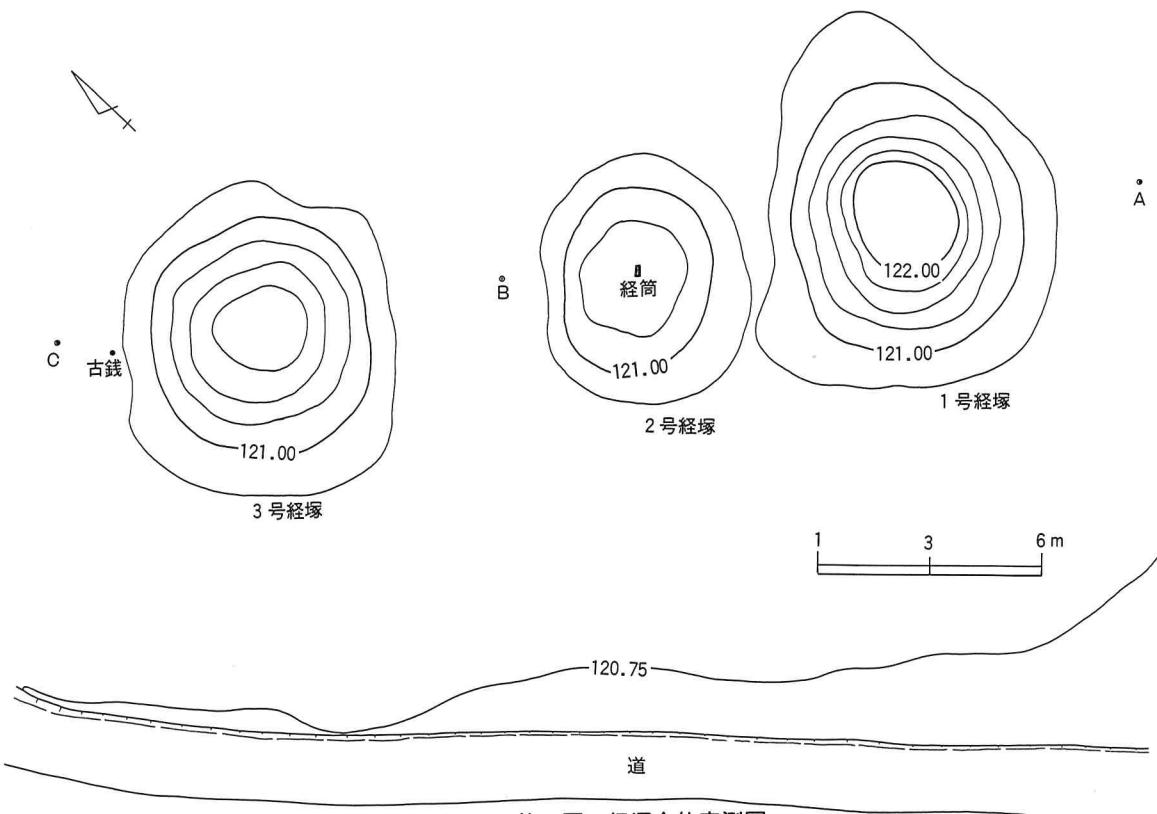
第37図 経塚断面図

4. 経 塚

位置と規模 本遺跡内のほぼ中央を北西から南東へ向う幅2~3mの道がある。この道は土地の人々から「しろみち(城道)」と呼ばれ、本遺跡からさらに南東へ300m程の地点に現存する中世犬飼城(根古屋城とも呼ばれる)跡へと通じている。塚は、丁度この道の北東側沿いに、3基並んで確認されている。1号塚と2号塚は接近しており、両塚の裾部はほとんど付いている。2号塚と3号塚の間には、約4mの距離がある。

塚の形状は、3基とも平面が円形の高塚である。各塚の大きさは、次のとおりである。1号塚は、径7.5m、高さ1.3m。2号塚は、径6m、高さ0.8m、3号塚は、7.3m、高さ1.2m。

盛土 盛土は表土を除くと一層しか認められない。盛土直下には旧表土層が鮮明に残っており、整地などを行った様子もみられない。また、盛土外周は、あまり深く掘られておらず40~50cm前後である。ただし、周溝のような形態はとらず、広範囲に渡って浅く掘られているという状態である。以上のように、塚の築造にあたっては、古墳のように周溝を掘り、版築で盛土するという方法はとらず、単に周辺の表土をかき集め、塚状に盛土したという程度のものである。



第38図 経塚全体実測図

出土遺物

経筒 2号塚のほぼ中心部で、表土下約20cmの深さから出土したものである。埋納施設と思われる遺構は認められず、直に埋められたものと思われる。

経筒は厚さ1mmの銅板製で、一部に鍍金の痕が残る。形状は六角柱状で、現存高は10.8cmである。底部は被底式の平底であり、2個の爪で留められている。側面には、観音開きの扉があり、留め金具も付けられている。なお、蓋は検出されていない。

両扉の内面には、次のように銘文が刻まれている。

〔右扉〕 (梵字) 奉納大乘妙典六十六部聖賢正

〔左扉〕 十羅刹女 享禄二天二月吉日
三十番神

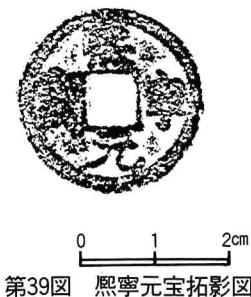
(註) 享禄二天は西暦1529年

また、裏側面の下部には、次のような銘文が刻まれている。

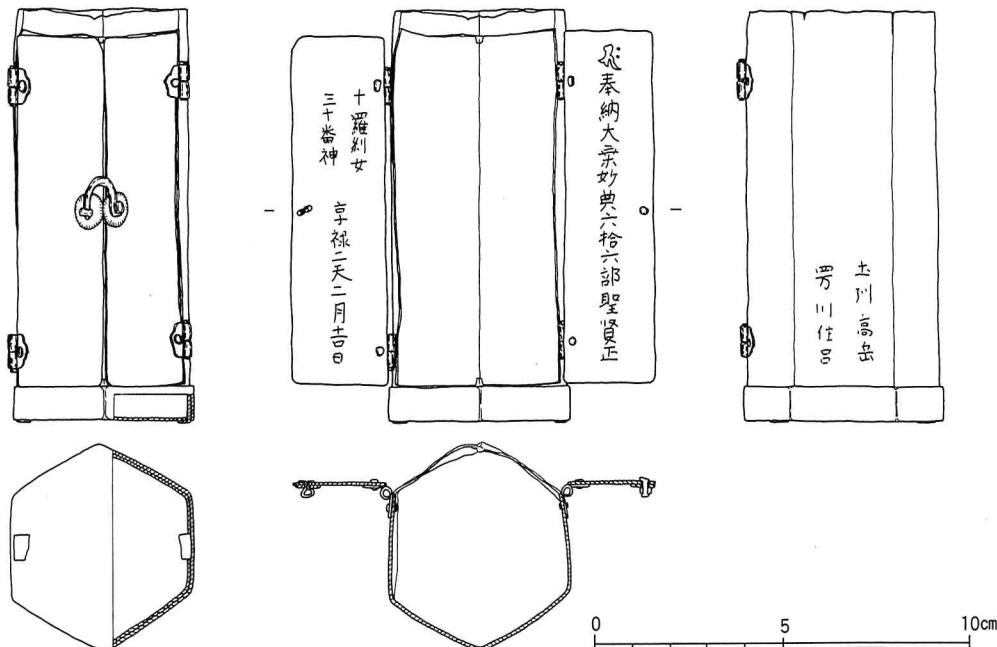
□□高岳 □川住呂
土州 ?

熙寧元宝 3号塚の北側裾部で、表土下30cm程の深さより出土したものである。盛土のために表土を堀り下げた部分であり、盛土からの流れた土によって埋まったものと思われる。

中国宋代の銭貨で、初鋳年代は西暦1068年とされている。



第39図 熙寧元宝拓影図



第40図 2号経塚出土経筒実測図

V まとめ

本年度、聖山公園遺跡において検出された主な遺構と遺物の概要については、前章で述べたとおりである。本遺跡は縄文時代から中世までと非常に時代の幅があり、内容的にも竪穴住居跡、古墳、各種土坑さらには経塚とかなり豊富である。しかも本遺跡の場合、一つのまとまった台地上内での検討がある程度可能な地理的条件下にあり、例えば、時代毎の集落占地のあり方やその変遷のし方、あるいは古墳群と集落との関係など、検討すべき問題点はかなり多いものと思われる。

上記したような問題点についての検討は、資料の出揃う本報告の段階で行なうことになると思われる。そこで、ここではその検討の際の前提となる時期的なこと、特に今回検出された古墳時代の竪穴住居跡と2期の円墳の時期について、主に伴出した土器を材料に少し考えておくことにしたい。

古墳時代住居跡出土の土器

今回報告した4軒の竪穴住居跡で切り合い関係にあるものはない。しかし、土師器群をみると、二つの様相があることがわかる。一つは1号～3号住居跡にみられるものであり、初期的な須恵器模倣壺と球胴甕の組合せである。もう一つは4号住居跡にみられるものであり、須恵器模倣壺と球胴甕に長胴甕の加わる組合せである。甕の長胴化は、住居跡内へのカマド付設が一般化するとともに開始され、その後時期が下るに従ってさらに進行していくものである。従って、1号～3号住居跡の土師器群と4号住居跡の土師器群との時間的な関係は、後者の方に新しい要素である長胴甕が加わるということから、前者を古く後者を新しく考えてよいものと思われる。ところで、両者の須恵器模倣壺については、基本的にはどちらのものも体部外面に稜を有して口縁部が直立するか僅かに内傾するというものであり、模倣壺としては早い段階のものである。しかし、細部をみると、1段階古いと考えられる1号～3号住居跡のものは、4号住居跡のものに比べて、全体に小ぶりで器高が深いこと、稜のつくりがシャープであること、赤彩されたものが目立つことなどの特徴をもっていることが指摘できる。

さて、以上のように住居跡出土の土器を土師器群の様相から2時期に分けたが、その時間的位置については1号住居跡より伴出した須恵器から考えてみたい。

1号住居跡からは、蓋と壺身が1個体づつ出土している。壺身は、器形的な特徴に加えて口径が11.0cmと小さいこと、底部ヘラ削りの範囲も1/2程度であることなどから陶邑編(註1)年のI期後半段階(TK23型式かTK47型式)に比定できるものである。蓋は、口縁部を

欠損すること、胎土に個性(粒子の粗い砂粒を多く含む)があることなどや問題はあるが、時期的にはやはりⅠ期後半段階に比定できるものと思われる。

現在、県内でⅠ期段階の須恵器を伴出した住居跡の報告例は、数例にすぎない。その中で、本遺跡1号～3号住居跡の土師器群とほぼ同じ様相(初期的な須恵器模倣壺の存在)^(註2)の土師器を出土した宇都宮市権現山北遺跡16号住居跡と真岡市井頭遺跡8区8号住居跡は、いずれもⅠ期後半段階の須恵器(権現山北遺跡16号遺跡はTK23型式比定の無蓋高壺、井頭遺跡8区8号住居跡はTK23型式かTK47型式比定の蓋)を伴出している。このようなことから、まだ類例は少ないものの、本遺跡1号～3号住居跡の土師器群のように初期的な須恵器模倣壺をもつ段階が、陶邑編年Ⅰ期後半段階(TK23型式かTK47型式)に併行する可能性は極めて強いものと考えられる。

古墳出土の土器

2号墳から検出された9個体の土師器壺と須恵器壺は、その出土状態からみて一括遺物であることは確実であり、しかも古墳築造直後に使用されたものと考えてよいものである。

2号墳の土師器壺は、偏平な半球形状を呈するもの(第36図1～6で、仮にA類とする)と体部外面に大きく張り出す稜を有して口縁部がやや内傾して立つもの(第36図7～9で仮りにB類とする)の2種類に分かれる。このA・B2種類の壺の組合せは、宇都宮市権現山北遺跡4号住居跡^(註4)、同市瑞穂野団地内遺跡北区5号住居跡^(註5)、上三川町上蒲生2号住居跡^(註6)、都賀町観音堂遺跡28号住居跡など、特に宇都宮市とその周辺を中心とした地域でよく検出されるものであり、いずれも本遺跡4号住居跡出土の長胴甕よりさらに長胴化の進んだ甕と共に存している。

ここで、仮に前述した住居跡出土の須恵器模倣壺をⅠ期の模倣壺とするならば、このAB2種類の壺はⅡ期の須恵器模倣壺と呼ぶべきものである。すなわち、A類が蓋、B類が壺身という関係であり、器形からみて恐らくTK10型式段階以降の須恵器蓋壺を模倣したものと思われる。なお、法量的にも、A・B類は前段階の壺に比較して口径が大型化するという特徴をもっており、この点でもⅡ期の須恵器模倣を裏付けていると言える。

一方、須恵器壺は、口頸部が大きくラッパ状に開くものである。陶邑編年では、TK10型式段階から口頸部の大型化が開始されるようであるが、2号墳の場合は、さらに口頸基部が細くなりつつあるものであり、TK43型式前後に比定できるものと考えられる。

さて、以上のように2号墳の土器群の年代は、土師器壺からもある程度の目安をつけることができたが、共伴する須恵器壺によってより限定された時間が与えられたと思われる。

1号墳から出土した土師器壺は、外面稜以下の底部が低いこと、口縁部が内湾気味に大きく開くこと、内面黒色処理であることなどの特徴を有している。器形的に類似するものは、宇都宮市瑞穂野団地遺跡北区15号住居跡や益子町大郷土南遺跡§1-01住居跡など、

主に古墳時代も終末に近い段階の住居跡にみられ、さらに歴史時代初頭（7世紀末～8世紀前葉）に考えられる南河内町薬師寺南遺跡第Ⅰ期の土師器坏にも残るようである。
(註8)

なお、この土師器は、検出された位置が横穴式石室の前庭部と思われるところであり、2号墳で検出された土器群のようにその築造年代を直接的に比定できる遺物にはなり難いものである。

古墳時代住居跡および古墳から出土した土器群の時間的位置は、おおむね以上のようなことと思われる。敢えて各土器群に実年代を付すとすれば、陶邑編年Ⅰ期後半段階に位置付けた1号～3号住居跡の土器群を6世紀初頭に、4号住居跡の土器群を初頭を除く6世紀前半に、陶邑編年TK43型式に近い趣を伴出した2号墳の土器群を6世紀後葉に、それぞれ考えている。なお、1号墳の土師器坏は、ヘラ磨き、黒色処理などがあることから7世紀でも早い段階のものと考えている。

註

- (1) 田辺昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安考古学クラブ 昭和42年
- (2) 久保哲三他 『権現山北遺跡』 宇都宮市教育委員会 昭和54年
- (3) 大金宣亮、橋本澄朗、川原由典他 『井頭』 栃木県教育委員会 昭和50年
- (4) 岩上照朗、石橋知明他 『宇都宮市瑞穂野工業団地内遺跡』 宇都宮市教育委員会
昭和53年
- (5) 大和久震平 『上蒲生遺跡発掘調査報告書』 日産自動車株式会社 昭和44年
- (6) 倉田芳郎他 「観音堂遺跡」『東北縦貫自動車道路埋蔵文化財発掘調査報告書』 栃木県教育委員会 昭和47年
- (7) 橋本澄朗、石川均 「大郷戸南遺跡」『県営圃場地内遺跡発掘調査報告書』 栃木県教育委員会 昭和56年
- (8) 橋本澄朗、川原由典、田熊清彦、梁木 誠 『薬師寺南遺跡』 栃木県教育委員会
昭和54年
- (9) 須恵器の年代については、田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 昭和56年の編年表
を参考にした。

埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向

(昭和56年8月28日宇都宮市教育委員会)

『文化財保護法』が公布されてから、すでに30余年が経過しているが、文化財の保護は万全とはいえない現状である。

特に、土地に埋蔵されている文化財(埋蔵文化財)の保護については、開発とのかねあいで、まことに憂慮すべき事態にある。

この現状に対応し、埋蔵文化財を保護するためには、行政側のみならず開発側の理解と協力が不可欠である。

そこで、本市内の埋蔵文化財包蔵地を開発により、やむをえず現状変更する場合は、『文化財保護法(昭和25年法律第214号)』を基本とし、『史跡、名勝、天然記念物及び埋蔵文化財包蔵地等の保護について(昭和39年文委記第14号)』、『埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化について(昭和56年府保記第17号)』等の主旨に沿って、次のような基本方向を定める。

1. 埋蔵文化財の保護と開発事業

埋蔵文化財包蔵地に開発事業の施行計画がある場合は、原則として次のように取扱うものとする。

- (1) 開発事業の当該計画から除外するものとする。
- (2) 開発事業地区に含めるが、何らかの方法で保存を図るものとする。
- (3) 現状変更せざるを得ない土地については、発掘調査を行って記録に残すものとする。

2. 開発事業に伴う発掘調査の経費について

開発事業により、やむを得ず埋蔵文化財包蔵地の発掘調査等をする場合の経費は、原則として開発事業者(原因者)の負担とし、具体的には、次のように取扱うものとする。

- (1) 発掘調査に至るまでの事前準備及び発掘調査後の報告書の作成等諸整理にかかる経費一切を原因者の負担とする。
- (2) 本市が原因者となる場合、前号の経費は、当該事業関係予算により措置する。

3. 事務手続について

埋蔵文化財包蔵地をやむをえず現状変更する場合は、原則として次のような事務手続きを行うものとする。

- (1) 原因者は、埋蔵文化財の取り扱いに関する『念書』を、市教育委員会に提出する。
- (2) 原因者は、市教育委員会との埋蔵文化財の取り扱いに関する事前協議を行う。
- (3) 原因者は、『土木工事等による埋蔵文化財発掘届』を市教育委員会を経由して文化庁に提出する。

- (4) 市教育委員会は、原因者の意向により、『発掘通知書』を文化庁に提出する。
- (5) 原因者は、発掘調査が終了した場合、速やかに報告書を作成し、市教育委員会を経由して文化庁に提出する。

4. 留意事項

この基本方向に定めのない事項及び実施にあたって疑義のある事項については、市教育委員会と原因者が十分協議して行うものとする。



聖山公園遺跡全景（南東上空から）



発掘前の遺跡風景（南から）



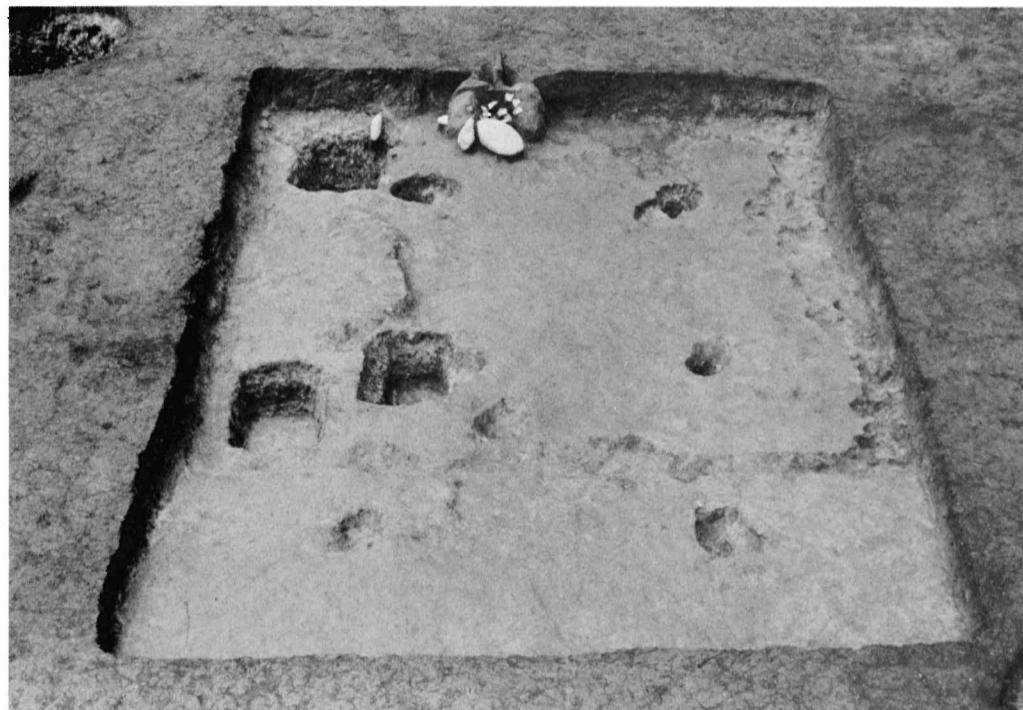
1号土壤縄文式土器出土状態（南西から）



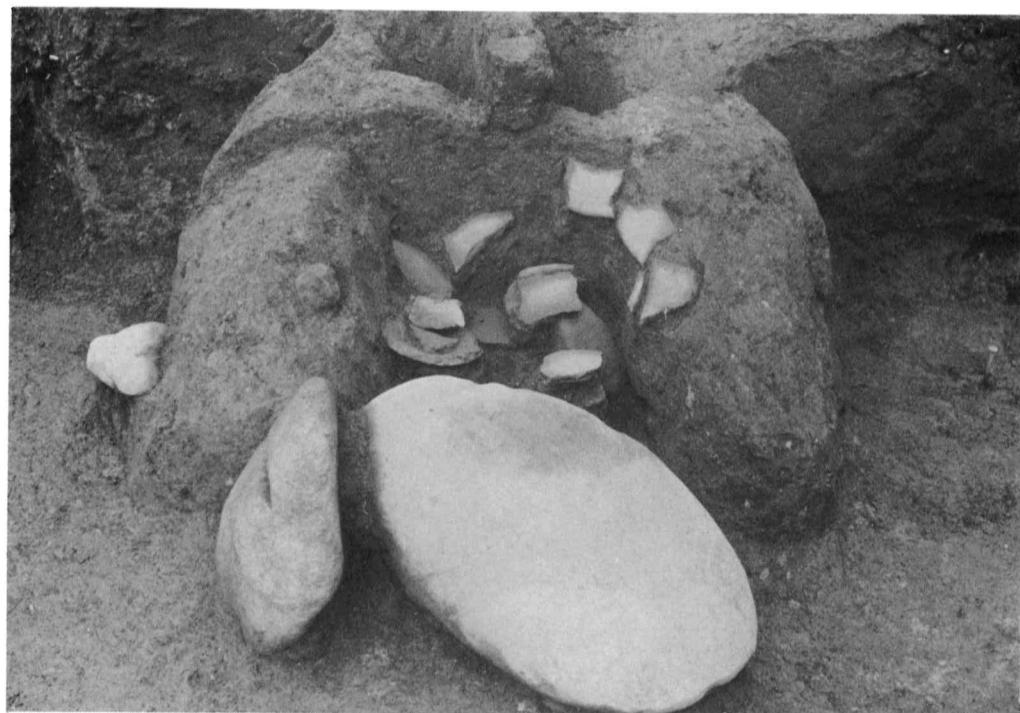
1号住居跡（南東から）



1号住居跡貯藏穴遺物出土状態（南東から）



3号住居跡（東から）



3号住居跡カマド（正面から）



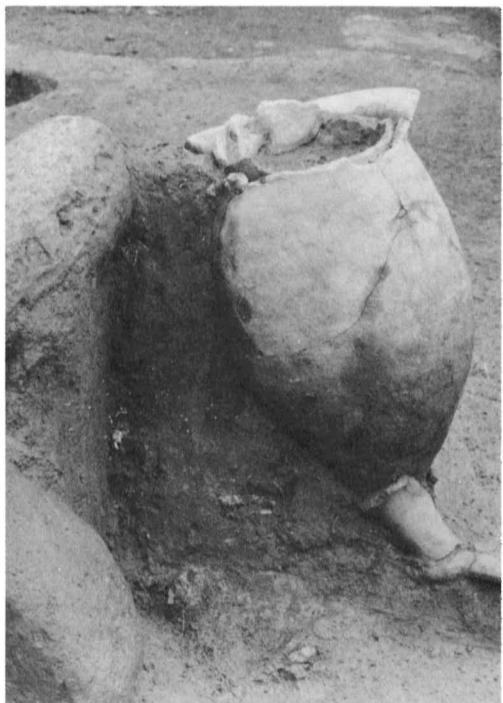
4号住居跡（東から）



4号住居跡カマド周辺遺物出土状態（南東から）



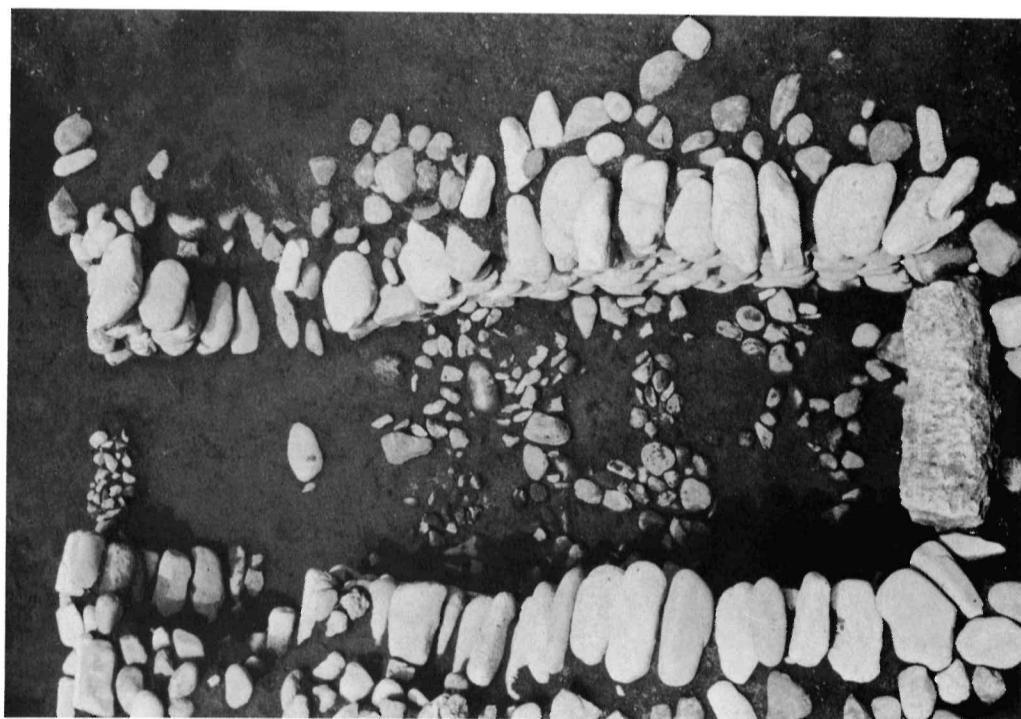
4号住居跡カマド遺物出土状態



4号住居跡カマドの甕と支脚



1号墳石室（正面から）



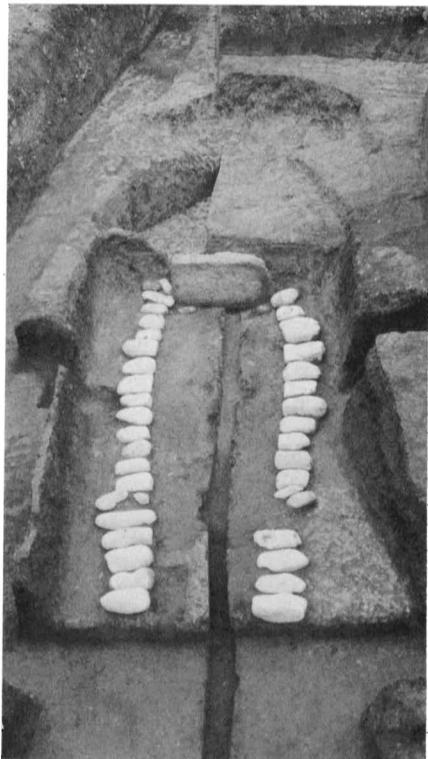
1号墳石室（上から）



1号墳石室の奥壁と西側壁



1号墳石室直刀出土状態



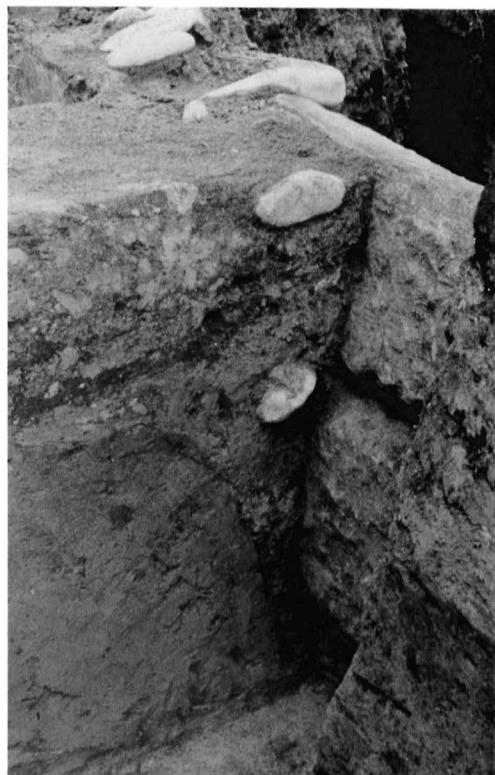
1号墳石室の掘り方全景



1号墳石室の西側壁裏込め断面



1号墳土師器壺の出土状態



1号墳石室の奥壁裏込め断面

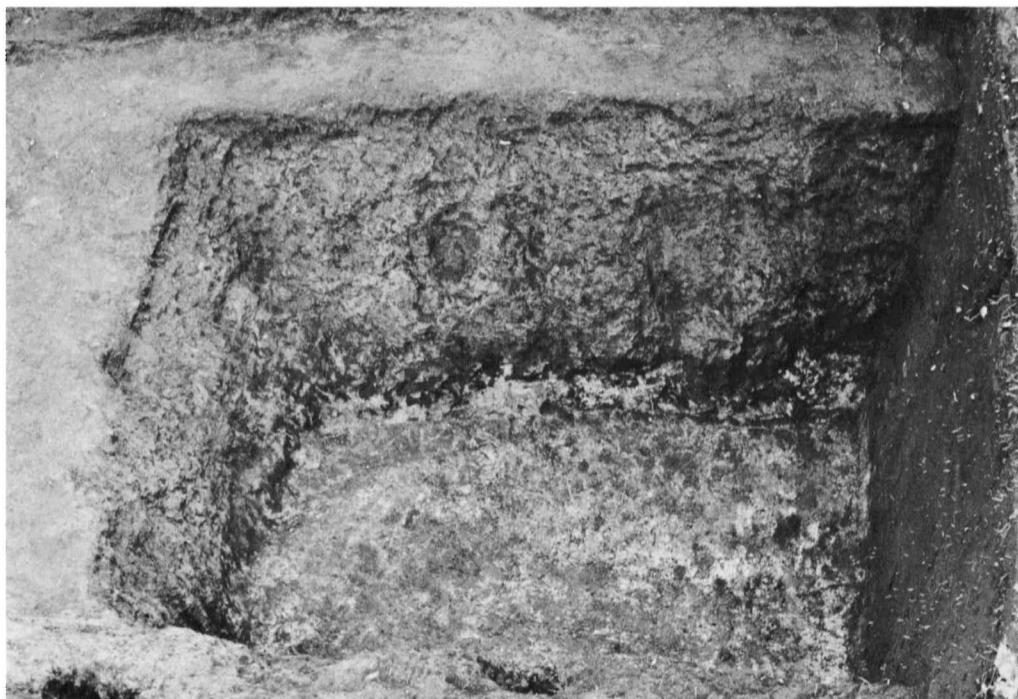


2号墳全景（北西から）

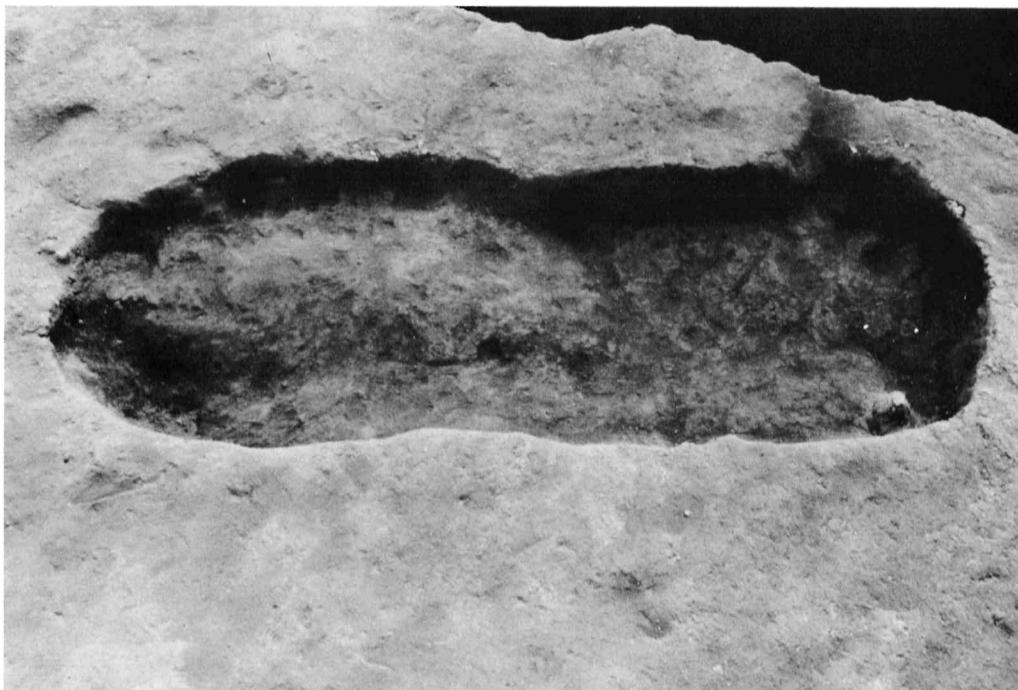


2号墳北西部周溝（南西から）

群出土状態



2号墳北東部周溝内大形土坑（南西から）



2号墳主体部土壙（東から）



2号墳主体部土壙鉄器出土状態（北東から）



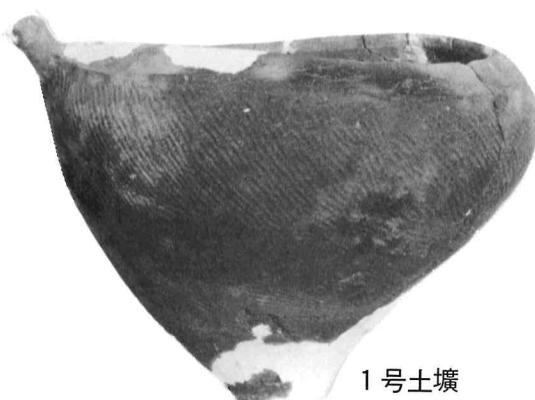
2号墳南東墳丘裾部土器群出土状態（南から）



1～3号経塚全景（南から）



1～3号経塚断面（南から）



1号土壤



2号住-4



4号住-13



4号住-12



4号住-15

土壤および住居跡・出土土器



4号住-14



1号住-14

4号住-10



4号住-8



1号住-11



4号住-9



3号住-8

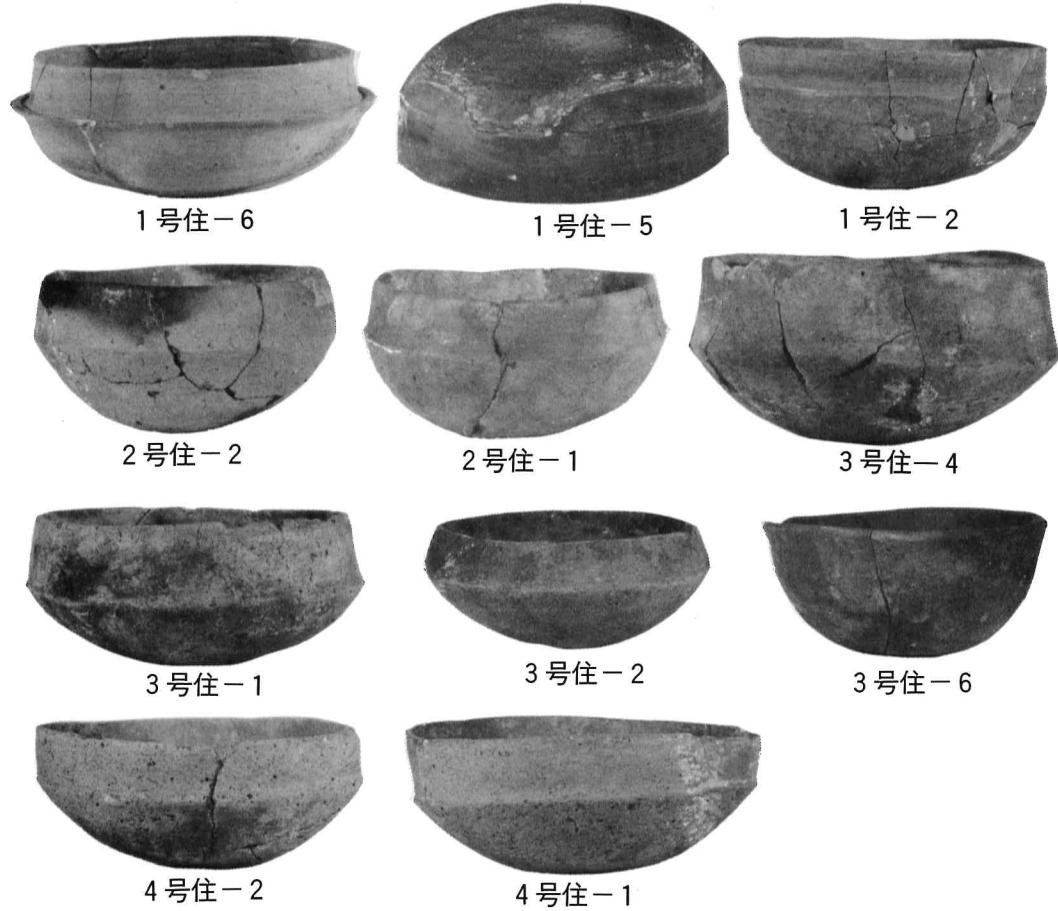


4号住-7

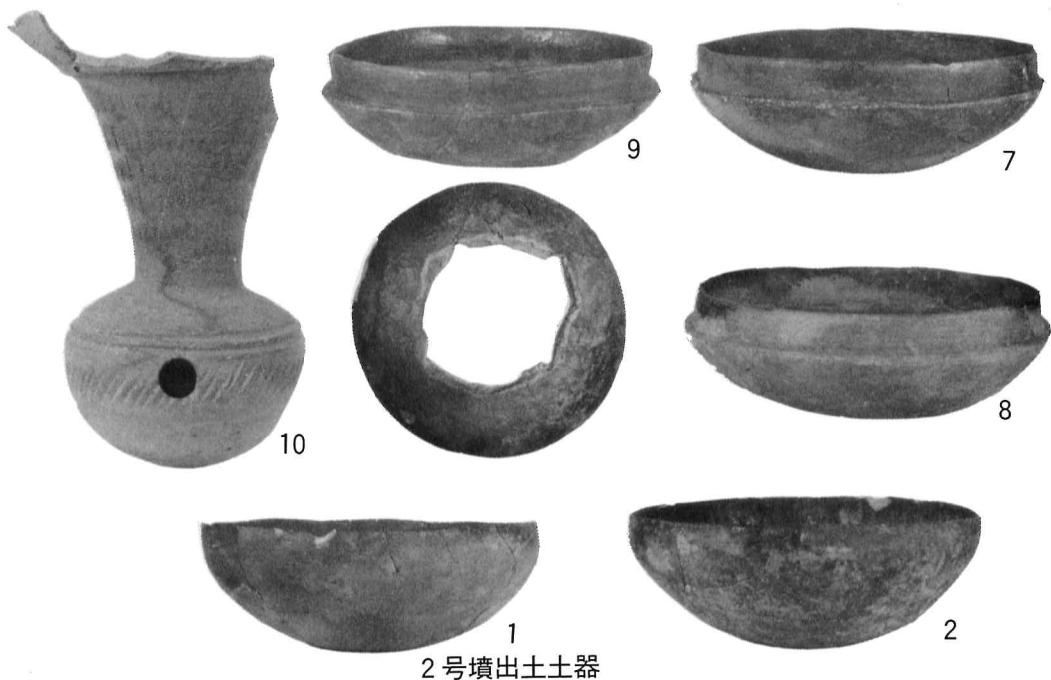


4号住-6

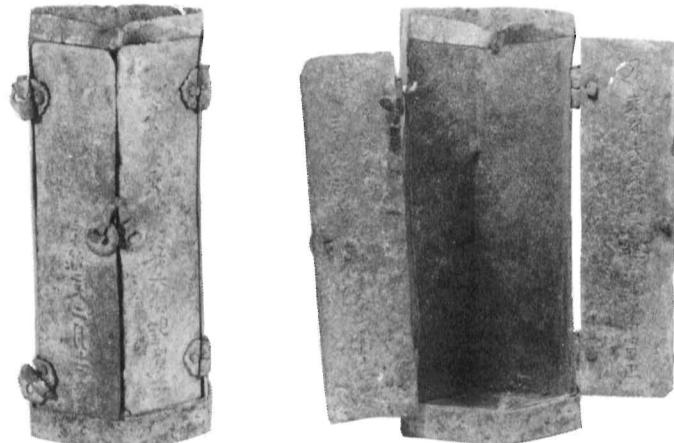
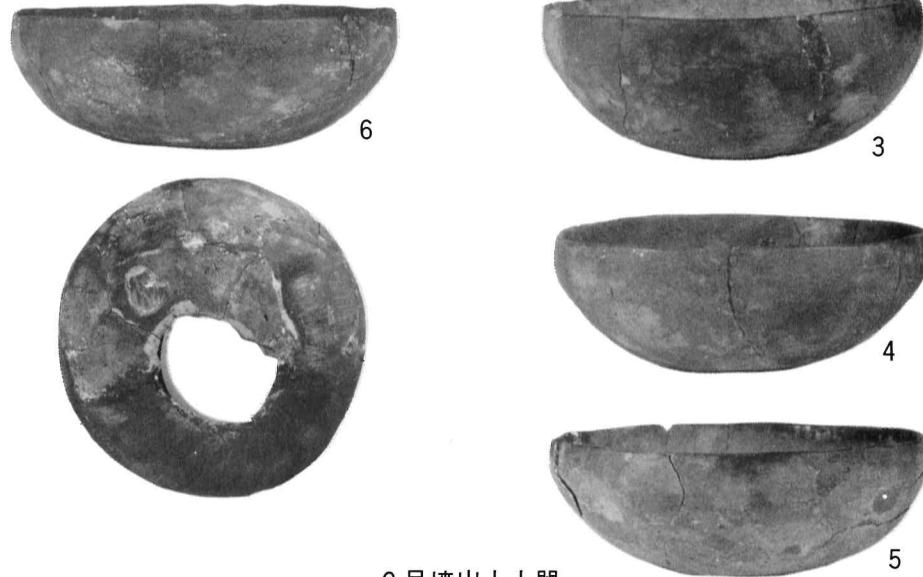
住居跡出土土器



住居跡出土土器



2号墳出土土器



2号経塚出土経筒

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第9集

聖山公園遺跡Ⅰ

——昭和57年度発掘調査概報——

昭和58年3月31日発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課

(宇都宮市中央1-1-13)

TEL (0286)37-2111

印刷 (株)松井ピ・テ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-7)

TEL (0286)62-2511